

丙子雜俎

二

昭和十一年二月起筆

特別
14
1919
473



丙子雜組

昭和二十二年二月上浣起筆

○自合の書高の入口は偏して紅雲山房とまふ漢
 打花六の篆字の額が指ゆてある。紅雲の
 二字を印つてはとすへはの槐南からいへ再
 来自合の印居を紅雲山房とまふ。一と頃未
 城下に任人此頃、訪ひ来る人の地名から名づけれ
 と思ふ人々あつた。實に自合の花六の刻した赤城
 霞峯の印があるが、とんまとい地名と紅雲を指さ
 合の七の印もある。而るに紅雲の酒の異名である
 ことを知つた。多分酒が顔面を紅色を抹すとい



郎八平田福

寓小に梅



山周田飛

風春南江

其家と形容しはあまらう。自らの酒飲ひの趣を
 みるが、紅や山あゝの歌を酒飲の肴淑とてま
 思ひ人のまゝに紅や家が酔といふ義也と
 思ふもいかにあまらう。其家の出典は左の如く
 あらう。

酒	青州	督卿	欽伯	碧香	雲泉	竹虎	竹葉
紅明	鴉黃	下若	村白	紫霞	夜黃	宜春	靈春
濁賢	招膠	荷屠	嬌碧	溫清	桑落	麴生	濁膠
蘇雲	眞一	舜泉	紅友	黃封	魯薄	香馬	瑞花
酌杏	聖從	支醇	紅霞	白玉	魯雲	聖清	規醉
明樽	酌水	酌鳥	喜會	雲液	若岸	魯味	菊水
							竹膠

〔新刻文林節用筆海往來自百七十七裏至百七十八表〕

の節分のころに故きを頼きん豆撒きのころにと
 少しく神をみよし、新の故にみかる寺境が節分の催しと



式部卿

式部卿のころに人集りて藝人や活動の儀を備へ未
 んがイと、文部省の之んを置き教化の府を寺院が助
 へ入るるに式部卿のころに藝人や活動の儀を備へ未
 だるが思ふもいかにあまらう。其家の出典は左の如く
 節分のころに故きを頼きん豆撒きのころにと
 少しく神をみよし、新の故にみかる寺境が節分の催しと
 り歩くるるに藝人や活動の儀を備へ未だるが思ふもいかにあまらう。其家
 の出典は左の如く
 節分のころに故きを頼きん豆撒きのころにと
 少しく神をみよし、新の故にみかる寺境が節分の催しと

上より 大衆の意

旅しむは... 旅人の心を加へ... 旅の道程... 旅の風景... 旅の人情... 旅の思い出... 旅の楽しみ... 旅の苦しみ... 旅の涙... 旅の笑... 旅の歌... 旅の舞... 旅の絵... 旅の書... 旅の詩... 旅の歌謡... 旅の民謡... 旅の童謡... 旅の歌謡集... 旅の民謡集... 旅の童謡集... 旅の歌謡集... 旅の民謡集... 旅の童謡集... 旅の歌謡集... 旅の民謡集... 旅の童謡集...



七木

下

旅打つといひキヤツと... 旅の道程... 旅の風景... 旅の人情... 旅の思い出... 旅の楽しみ... 旅の苦しみ... 旅の涙... 旅の笑... 旅の歌... 旅の舞... 旅の絵... 旅の書... 旅の詩... 旅の歌謡... 旅の民謡... 旅の童謡... 旅の歌謡集... 旅の民謡集... 旅の童謡集... 旅の歌謡集... 旅の民謡集... 旅の童謡集... 旅の歌謡集... 旅の民謡集... 旅の童謡集...

人があれ思ひ出ば、と漢と自分の恥を呼んで居た。
美の大体切り振りのこと、とあるは、
○時々の世の舊習法が流俗に上るが、自合を以て四ツ
目屋におおしるもの、とあるは、
○家をのほれ、ともあるが、今、其の位地を、
一ころりてある。只、此の氣がつかうらふに、四ツ目屋
と軒を、
かゝれと、
のこと、
出、
と



【二】 衛生器具の元祖四ツ目屋

現在銀座西六目丁の一廓は、慥か山下町と山城町とに跨つてゐると思ふが、江戸時代、山下町の現在電車通りの處に何んでも御座れと云ふ便利調法な古着屋と、衛生器具屋の元祖で有名な四ツ目屋とが軒を並べてゐたものだ。つまり古着屋「丸竹」が角店になり、其の隣りが四ツ目屋であつた。

此の古着の丸竹は、江戸から明治初期にかけてとても有名な家だつた。何故それ程有名であつたかと云ふに、それに此の丸竹は凡ゆる職業人が素裸で飛び込んでも、足の先から頭のてつべんに至るまで、すつかり間に合せると云ふ、至つて便利調法な店であつたからだ。つまりどんな商賣人でも亦、職業の人でも、其の商賣、其の職業にあてはまつた衣裝をとり揃へてゐたのである。例へば大工と云へば大工の服装、商人と云へば商人の服装、神官と云へば神官の服装、僧侶と云へば僧侶の服装と云つたやうに、其の職業にふさはしい古着が、こゝで一切間に合はされたのである。
で、此の丸竹は其の頃、とても評判になつたもので、此界

限の者なら誰れ知らぬ者もないと云ふ程、顯著な存在と云へば、其の隣りの四ツ目屋は、それ以上に有名なもので、年頃の青年なら誰れ一人知らぬ者もないと云ふ程、周知のものであつた。全く四ツ目屋と云へば、誰れでも「あ、あれか」とうなづく程、顯著な存在の一つだつた。それも其の筈だ。四ツ目屋と云へば、衛生器具屋として、銀座は因より江戸市中に於ても其の元祖を爲すもので、少くとも其の老舗であつたことは争へない事實だ。それに其の頃は、かうした特種な商法を營むものが少く、江戸末期にあつては、全市を通じても數える程しかなかつたものだ。又今日のそれと異なり、頗る奇抜なものが多く、而かも、それ等が、殆ど公然の如くに商はれてゐたからでもある。

四ツ目屋が、當時、如何に有名な存在であつたかは、其の頃川を柳見ても、其の間の消息を知ることが出来るであらう何故なら、江戸時代の川柳子は、四ツ目屋に絡まる句をさまざまと詠み、皮肉に洒落てもゐるからだ。
△小田原提：灯四ツ目屋で××若隠居。
こんな風なものが數限りなくある。それ程銀座の四ツ目屋は、賣名的にも成功してゐたものだ。
特に、當時は、今日と異なり、其の取締りも緩慢だつたの

肅正色を織り交ぜて

年男もまづ華やか

この人出何十萬？

分節ふけ

今日帝都の徳島此處に繰ひろげられる節分追儺儀式の豆撒き陣——文部省の權槍で派手すぎる年男の出陣を阻まれて、昨年あたりの人氣取り主義な傾向は見られないが、多少の「非合法の便法」で顔觸れの羅り集めに抜かりはない

たゞ

例年と異つた寒風、は、異常な節分追儺儀式の本所回向院の肅正色豆撒き儀式を筆頭に肅正の色彩を濃厚に加味したものが多く、また豆撒き陣の應正としては浅草寺の御札撒きの古式復活などがあり、文部省宗教局の神社佛閣の尊嚴保持の大旗を高くかざしてゐる、これららしい八百八町の神社佛閣の豆撒きの上、デパート、ダンスホールに描

厳肅

式豆撒きから、ジャズに踊り狂ふステップ踏み聞かれる戯曲化された豆撒きいたるまで、あらゆる豆は多種多様な年男、年女の手ではら撒かれ、殺到する信者の群は待機した郊外電車

鶴見總持寺

節分追儺儀式は午後八時から古式に則つて本山に舉行、年男三十余名出動して二千人の参詣者を迎へる見込みで午後十時前後終了する

加藤大將

芝の琴平神社

昔懐し札撒き

浅草寺の江戸時代情調

節分會の宗教的進正を叫ぶ浅草寺の御札撒きは古式に則つて第一回(午後二時—三時)第二回(午後五時—五時半)第三回(午後七時—八時半)第四回(午後九時—九時半)にわたつて行はれる、浅草寺の古式御札撒きは江戸名所圖籍にも載つてゐる程有名なものだが明治初年に中絶されてゐたのを今回復活した

本所回向院 午後七時

變り種・護國寺

全國へ中繼放送

護國寺では例年の如く古式に則つて嚴肅な追儺式を行ひ、本堂主導師のもとに本堂觀世音菩薩の前で息災延命の大護摩を修行し、Kから全國中繼で實況放送する、この年男は横山府知事、牛家市長、第一相互の矢野恒太氏、仙波、武田兩中將のほか茶道の關係で昨年も袴着きで登壇したアメリカ大使館の參事ネヴィル氏、ロンドンタイムス特派員バイヤス氏ほか日本趣味の外人が夫人を連れ、エトランゼの豆撒きを行ふ

穴守稻荷 穴守稻荷ではカシ鏡岩、香山、年寄春日山ほか有志三十余名が年男として出場、午後八時

大御所の成田山

實業家連が總出場

小笠原子のはか同子愛婿の松井久野球選手と、宮武三郎選手、三浦義次子爵、千坂海軍中將、劇界の王者大谷次郎氏等、オールスターキャストの盛況である

川崎大師平間寺 方面の参詣者を總動員する川崎大師平間寺では午後六時から厄

豆撒きでは大御所格の成田山新勝寺の節分會は昨三日夜八時の一審観で荒木山主が一山の大家を率ゐて山内の大敵を行ひ、四日午前一時の第二観とともに山主と年男十名が入堂して開運厄除大護摩供養の奉修、第三観で山主の音頭で

追儺式 追儺式

芝増上寺

追儺式を行つてから午後七時から黒本尊節分大祈願會と豆撒式を行ふ午後七時年男が山門に着いてから大島法主から先づ福祿が授けられ、放散道場酒、散花、噴霧、表白、年男入堂、法主昇殿、作相、四奉請、開經文、佛心願、心經、鳴

午後五時皇居

午後六時から厄

追儺式

追儺式

○二月邦の平凡社

書藝に現代名士

書道観 欄内

余の字をこれ程看

ぬぬてある。即ち

如下

○自分の悪書に就ては何も語るべき経歴はありませんが、私の生國越後は菱湖の故郷でもあり、一時菱湖風が風靡した頃私の父などは菱湖風を刻苦して學び能書でありました。晩年は篆書に没頭し、これも堂に入りましたが、私などは幼年から西洋の學問に親しみましたので、字を習ふ時間ありませんでした。維新の匂々は山陽の書風が流行つて幼少の自分も何となく其の影響を受けました。新聞記者時代に筆禍で入獄しました折、獄中に佐瀬得所の草書千字文がありました。草書を習ふはコンナ書だと、字を崩すことを此の手本で習ひましたが、どうも先入主は恐ろしいもので、山陽の書風が嫌ひになつてモット高い處と考へましても、幼少の時習つた癖が何としてもぬけませぬ。今更ながら手本は最初からよく選ぶべきだと思ひます。

○現代の傾向は、ある方面に於て書藝は餘程進んでゐます。併しある方面は全く成つて居りません。毎々書道會の展覽を見て感服しますのは、草假名と篆體の頗る進んだことで、これ丈は徳川期を軼してゐるかに思はれます。此頃中林梧竹の展觀を見ましたが、書家としてあれほどの藝術家を出したのも近代の誇りでありませう。私などの希望は決して高尚なことを欲するのでなく、日用一般誰れも彼れも是非書かねばならぬ書簡の書がモット進んで貰ひたいと思ひます。書風の如何は問ふ所ではありません。幼稚極まる手紙の書は、其の人の格をどれほど損ずるか知れません。少しの心掛で出来る事だから、書道會あたりで獎勵して貰ひたいものです。書簡展覽會を開くなども一案でせう。書藝に達した人でも手紙の拙劣な人は随分澤山あります。

○或る画家が父の書藝を看して、ことを觀てん話がある。

日小兒の父もよくヤンヤヤもの、仕末のわらぬキカシボの書藝
七圍のれが、敢て断りのりして、筆抱くも毎の父の供を相
手して漸かに画像が出来て、父を父母と云つたこと
り、父母と云つて感心した、父の父もよくヤンヤヤもの
志師が出来てゐるが、父母の教りもよくあるが、父の
むも使ひの、こんな可貴いもの志師を、父の子から習ひ
せしむるが、父の、父の、父の、父の、父の、父の、父の、
お中子控方の可貴いもの、心掛の心り、父の、父の、父の、
父、父を引き出すが、私の中の父の、父の、父の、父の、
いり、父の、父の、父の、父の、父の、父の、父の、父の、
父の、父の、父の、父の、父の、父の、父の、父の、父の、

こバスに上せられたるまきでせん、私の何一も美化しませんでしたし、
此美のお子さまの内郡も滞在しあつたわい、多んと
引の張り出せば、そのわい、私共画家のまう、これまゝを
引つせらう、出づる為り、此世に居るの、わい、別う、高ん、此美
を、驚りし、現りす、ことか、私共、使命、わい、まう、まう、と云
ふ、わい、舎、其の、あつ、面、わい、活、わい、あつ、

〇我の、ま、送、本、三、要、を、説、く、まう、まう、曰、く、カ、ハ、ン
曰、く、地、ハ、ン、曰、く、着、ハ、ン、〇、返、鹿、の、勝、敗、こ、ん、と
繫、る、而、し、中、に、就、き、踏、込、の、法、を、振、つ、ま、の、カ、ハ、ン
と、す、投、案、の、見、換、春、北、中、に、在、る、事、ま、ま、の、故、也
〇亦、わい、雪、の、あ、ま、ふ、び、あ、つ、れ、一、時、こ、路、り、出、し、れ、雪、か、え、ら
く、積、り、の、わい、こ、ま、振、つ、と、大、雪、と、ま、ま、七、い、ん、が、と、ま、ま、時



を、移、す、と、四、時、以、ま、い、池、を、こ、の、松、の、雪、り、為、り、枝、が、垂、ん
と、折、ん、ま、う、ま、う、ま、う、こ、の、か、氣、が、様、め、れ、候、う、ま、う、く、降、り
止、ま、ま、い、の、ひ、夜、も、う、ま、う、ま、う、の、風、の、出、し、ま、ま、と、雪、を
ま、う、に、か、雪、の、漸、や、く、や、ん、れ、雪、勢、が、ま、の、時、方、お、疎、を
生、れ、ま、う、う、じ、才、が、雪、勢、と、運、命、を、共、う、ま、う、し、て
電、車、ま、ま、い、流、る、の、困、難、に、あ、つ、ま、う、を、危、に、即、令、に
あ、つ、の、ん、此、の、雪、の、さ、か、か、一、人、出、を、阻、み、通、任、有、り、候、
此、汽、車、と、ぬ、ぬ、人、出、あ、つ、ま、ま、を、往、取、の、後、悔、を、し、て
大、寺、院、に、お、七、與、か、し、誤、り、希、の、為、り、長、久、の、換、令、を
か、ま、ま、う、ま、ま、い、お、急、急、と、馳、せ、れ、れ、免、に、前、津、元、に、抵
ける、長、四、神、社、の、早、令、異、候、に、非、ず、を、放、免、し、
此、又、次、き、護、國、寺、の、進、進、の、式、を、お、放、免、を、し、此、が

徳田寺の魂のアーナウニカーの報告も伝へても降雪
のあり七十五名と騒がせられたり男の重さゆゑか
二十五名も死んで居り了るやうな出来事人出七想傳
の如くや救ひあつたといふ。夜が明けて来る迄上の
雪を足さしと踏まへ一人は降り積つてゐた。朝刊の
記事を見ると、昨夜の都下の全部測量界の電車七百
動車もよんで運轉中止の有様が、降雪の為め三千
名の人退か出後、電車の運轉も止るが降雪の南
つれやうな騒ぎを、いふ所々の人々の足も路傍から車と
路傍をよんで騒がせ居る。其沙汰もやみとさう、電
車運轉も止るさう、毎日送電も中止するさうといふ。
地方から来る人達の市区から出たといふのは、男の

標高

全部是迄のの態さうして、日比谷を走るさうの悲鳴の聲
が先んずあり、炊き出しとやめて救済さうさうの仕末
が、入入りておれといふ。帰らざる由さう、家内も已
まらざる朝まで止たせしむることかじむを得るさう
つれづれどこの別荘でも臨時の旅館さうさうに中央
停車場も七五名も待たせしむる。主権の地を
さうさうの難者や、いふさう、田舎を以つて
口元壊した。自動車も大雪の爲め運轉不能の候
候の事さうと評せらるることさうさう、いふさう、
今も東京の全市、雪地獄さうさう、いふさう、
目の大空の云のさうさう、僅ら一尺の積雪、大
都人さうさう、大混雑、踏つたことを目のさうさう、

〇近頃「自覚」といふ語が志きり用ひられ、遠くま
 國民が夢に自覚の光を照らし、自己を志きり振り回し
 し、他人を志きを認め、他人の地位の卑しい人が七十
 数年前のことと、呼ぶ言葉もさうする、ことごとく
 野の地、誰れとせんと呼び、自ら決する、世の物、氏
 とう君とうせんとうと、さういふやうにさういふ。ふん、人が
 自覚した結果、誰れも自己認識をあらわして見
 つつ、その人を軽蔑することが出来ず、いくくら敬する
 やうになる。ふん、世界大衆以来の傾向、随分
 ふん、あつた、代が、就の、さういふことと、さういふお、免、免、
 と、楯をのく、職、二や、備、え、人、が、二、命、主、の、命、
 命、に、服、せ、る、が、校、の、命、主、の、命、に、服、し、る、い、て、



うる、厄、の、こと、が
 頻りにして起る
 天地が、さういふ、愛の
 人、と、使、う、こと、や
 人、と、共、向、する、や、う
 る、こと、が、的、程、面
 倒、さ、う、つ、て、来、た、
 ふん、が、七、つ、と、甚、し、
 ち、と、社、会、の、程、
 紀、が、今、も、二、三、年、に
 收拾、の、出来、さう、
 や、い、ま、さう、七、七、

新平の命令を背する。日本も今ト是を考へて居るが如
い。但し日本も一時のやうな柔軟の心持（漸やく脚の強
か）硬さの傾向もある。

日本も勿論部下を御するおのづから習慣的方法があつ
た。温情主義といふのもその方法のあつたか、一時皆働多職
をも、温情主義の利権時勢にまじりていふことを感ぜ
しめられたこともあつたが、必し落つていくこと、温情主
義が部を動かす最も重要なこと、規則づくめな交際といひ
た。温情主義といふことは、規則づくめな交際といひ
人情を酌むことを云ふの如か、このも程方があつて、温
情が規則を破壊する、温情に慣れた人、（人）却つて言を生かす。人間として部を御するからである。



温情が大抵である。相違ないが、免角温情主義が
餘り効果がある。敵も時勢に逆行するやうに
た。温情と云ふことも只の形式だけの温情の定人表
かまひから人を動かす力を缺くからである。
人の上を立つて部を御せんとも、おのづから
駕御の方法の、馬を御する駕法があること、人
間といふ人も違つた訓練と道が無んが、
んか、その法は進歩的である人の実験や、
委するのみ、之を訓練する所が多い。此う折角
その板が技術と主流の習つて教師と云うことも、
使用するも、（人）使用すること、
教師の今も弱さを仕よる、（人）無能なる人、
人を御するの法

ハ全然教へらるゝのむあるから

人を御するに人々御せらるゝにこゝに及ぶむあるが鏡の如
四のやうな事をして相関の事ある、人を御するに人は
御せんは経験がさうしてゐる、而るも学校をいへば
うごあるか、ちや年の廿五出や、先づ人に御せんて糊
ひ七ゆるゝの成業後直る人の上つて御せんと
へるゝより或る特徴のもの限つて、多く功を積み
年々重ねて漸やく人の上る上つていふのである、
んは号板、柱のハ先づ服従目の教を受けぬいな
ゝ、此等人の智知をさくべきやを念とし心も
せん、然れども、昔河や菴が傳ふおも此教を
取せん、一生を誤るゝのである、亦またの事ある、うま

御用

が御用を受け得るゝもの、やがて人の上る上つ時、巧みやが
御するの人のさうのもあるから、終業のたつ大御、
一人仕らるゝ道と屋略するゝをいふ、
校に柱を此の教育方法をいへんとある所ハさういふ

先づ自己認識のつづく、自らいふが自己批判ハ一向
進まぬ、自己を覆つて共に自己を批判するむ、
ハ、自己を悔むのりやが鼻持はさういふ、自己認識の誰んも
やんが自己批判するゝ相関の論理的能力をいふ、自らをいふ
批判するゝ相関の勇氣をいふ、之んが若し自己認識の
伴ひの自己認識も減らさるゝことあるが先づ自己批判
あることが痛である、然るも、自らをいふ自己批判を行はしむ
べきや、云々、教育に依るのめ、勿論世故も長

るもの、実験上自己批判をなすけい、実験を待す
斯のこことを行いしめんとする。其先覚の人が教へることを
道へる、文化の進人れお、自己認識の昂奮を必しお、
憂へる、其こふ得り、一方自己批判が、其を善導す
し抑制調節するかくある。

人間の性格の表面は、此千態を、曲つたりや、
人だのや、^い癖のあつたや、人々、^い癖のあつたや、^い癖のあつたや、
す思つて、其も不快を催すや、^い癖のあつたや、^い癖のあつたや、
大勢を率へ行く、^い癖のあつたや、^い癖のあつたや、
人が、^い癖のあつたや、^い癖のあつたや、
この比、^い癖のあつたや、^い癖のあつたや、
して、^い癖のあつたや、^い癖のあつたや、



クシ、^い癖のあつたや、^い癖のあつたや、
て、^い癖のあつたや、^い癖のあつたや、
の、^い癖のあつたや、^い癖のあつたや、
性の、^い癖のあつたや、^い癖のあつたや、
^い癖のあつたや、^い癖のあつたや、
も、^い癖のあつたや、^い癖のあつたや、
と、^い癖のあつたや、^い癖のあつたや、
つ、^い癖のあつたや、^い癖のあつたや、
か、^い癖のあつたや、^い癖のあつたや、
術、^い癖のあつたや、^い癖のあつたや、

教めど、^{いかに}多敷を争くのである人の斯の雅量と忍耐は無
いからである。

罪人と牢獄に拘禁するもの其の目的は善感化を企図する
の事である。其目的の達しは、^{目的}連しは、^{目的}囚人の
獄中の困つてゐる、^{目的}志の遷善の効を奏せしむる
特定の刑期が満ちて囚人の権利として^{目的}赦免を要
求し得る可成るものなり。然し、^{目的}囚人の
のこころも世々のある。佛し牢獄囚と云ふ遷善感化が出来ぬ
い澤かある。感化しとも拘束の方から進んで進んでゐる
感化が希うものなり。此の事である。此の思想は、^{目的}深
むと、^{目的}罪を犯すものがある。善感化の轉向するものと
拘り判事の懲罰や、^{目的}入母なる人、^{目的}骨肉の涙、^{目的}涙つて支配

藤原

せんての一般囚人とも洲海が怒利のあんなに改換の効を得ら
ないから、^{目的}相違ひがある。此の事である。此の思想は、^{目的}深
むと、^{目的}罪を犯すものがある。

○健文社の年内録を、昨年秋自合と改題し、巻下
の既刊逸年のあり、日本風味を、開する工のせしむる
多いが、あゝを一冊に纏めて見れば、と云ふは、丁度その以
健文社から「日本風味」と云ふ雑誌とを刊し、三紙の
中から趣味雑誌を併し、自合七一序、漢し、此際
あり、此れも、存を、改題し、任りし、田幸、既刊逸年
を、改題し、編載し、と云ふ、黙を、附して、やうに、
五、五、五、と云ふ、と云ふ、思つれば、但、五、五、五、と
六百頁、と云ふ、此、此、此、此、此、此、此、此、此、此、
か、七、校、正、七、編、入、れ、ら、る、其、以、健、文、社、に、此、稿、稿、稿、稿、
内、部、に、あ、り、の、政、策、も、あ、り、此、稿、稿、稿、稿、稿、稿、稿、稿、稿、稿、
年、を、改、題、し、自、合、七、別、に、題、名、を、改、め、る、こ、と、を、改、題、し、



今も出版局を為す地はとらう、老千部、印と持
し、緑本の跋文も初めをえん。此の跋文、此の
刊行の顛末をあらうとて、これに語り、自今も

の結果、數項目に分類した選集が成つたけれども、これを出版編成するまでに原稿の置場所などを多少變へたりなど、私の勝手なことをして、却つて無秩序のものにしてしまつたのかも知れない。けれども元來隨筆は無秩序のところ、面白味があり、一部によりて全部を代表するところに特異性があるのだから、その意味から本書は市島翁の全貌ではないにしても、全貌の面目を窺へると思ふ。

市島翁の存在は現代に於ける特異の存在である。かつて政治を志し、新聞記者としての大先輩であり、教育事業に携はり、早稻田大學圖書館長としてつとに令名あり、學者としては世の學者の如きでなく、著述家としては世の著述家の如きでなく、しかもこれ等の一切のものが渾然として一家の相をなして、人間市島を醸成してゐる。世に學者の隨筆があり、趣味家の隨筆があり、政治家、經世家と稱するもの、隨筆がある。けれども翁の隨筆のみはこれ等のものが渾然一體となつたものと稱してよろしからう。大市島の人間としての現はれであり、明治、大正、昭和を一貫する時代の力を透して、しかも多方面からも、を觀てゐる點で當代の最高峰と

言へないであらうか。

本書に集録されたものは、前にも言ひし如く日本趣味に關するものを選集したのだから、趣味を中心とした隨筆集になつたことは言ふまでもない。しかし趣味はその人の最も滋味のある方面だといへる。論文は西洋館の應接室のやうなものであり、小説は寢室だとすれば、隨筆は茶の間であり、書齋であらう。その人の趣味が最もよく表現せられ、生活が如實に流露してゐるものが茶の間であり、書齋である。

翁と對座して話をしてゐると、これ等の多方面な話題はそれからそれへと繰り擴げられる。即ちこの隨筆集は書かれたる座談であり、清談であり、閑話である。世に肩の凝らない讀物といふのは、その大部分は興味中心のものに過ぎないけれども、翁の隨筆に至りては、打解けてゐながら、しかも何事かを考へさせられ、教へられる點で全く異色あるものといへる。

翁と對談してゐると、警世家らしい慷慨的な熱血の迸ることもあれば、學者肌の地味と靜かさを示すこともあり、趣味家らしい庭の話や茶の話などの閑話に耽る。それかといつて七十六

今も出版局を為す地はとらう、老千部への印を携
し、緑巾の跋文も初めをえん。此の跋文は此書の
刊行の顛末をさういふことにより、自ら公する事

歳の高齡でありながら、耳もよく聴えるし、音聲も朗々として壯年の朗かさをみせてくれる。それも、一度酒に及べば、これは得意の壇場として明朗な卷舌調子さへ現はれるといふ明か
るさである。

いつか茶人の話をしてゐた時、現代の茶人は枝葉末節に捉はれてゐるから話にならぬ。おれは茶人になれば小堀遠州にはなれぬが、干利休にはなれる自信があるといふ話もあつた。私はそれを面白いと思つて聴いてゐた。さういふところに翁の面目が躍如としてゐる。

この書の表題ははじめ「日本趣味談叢」としやうかとも思つたが、それが「春城雑話」となり「春城閑話」に發展した。翁はその命名をお願いしたけれども、「適當にやれ」といふ豪放振りで、止むを得ず「春城閑話」で落ちついた。組み方にも多少の注意を拂つてみたが、これまで進歩した現代の印刷術ではどうも思ふやうにも出来ない。昔の木版の味は到底出せない。印刷術の進歩は趣味の方からいへば一種の退歩でもある。

「アー・カニ・カン・ハム夫人及アルクリン醫學會圖書館長チャールス・フランケンベルガー氏等ヨリ、今回ノ國際圖書館會議へ出席ノ日
集古十種の隠れた編纂者

白河樂翁侯の集古十種は谷文晁が編纂したやうに云はれてゐるが、實際に於ては多くの人が與つたのであらう、それ等の人は皆下積となつて一向に知れない。あの書物は當時に於ては大出版と云ふてよいものである。上版された外に續篇とも見做さるべき稿本が立派に表装されて松平家に藏してあるのを先年拜見したこともあるが、全國に亘たり各部門の物をあれほど蒐集するには、なか／＼人手が多かつたらうと想像されるが、文晁門下の者が諸方へ出張したやうなことの外、これ迄編纂に與つた人は知れなかつた。然るに秋田の人で白雲と云ふ僧が樂翁侯の知遇を得て此の編纂に助力した事を初めて知つた。此僧は南畫をよくするもので、樂翁侯に知られて、白河の常泉寺の住職となつたが、侯の内命を受け、諸國を遍歴して諸社寺の寶器書畫の類を摸寫し、古碑古鏡古瓦の金石類をも蒐集したと云はれてゐる、當時此僧に會した菅茶山は左の詩を詠してゐる。

贈白雲上人 上人奥州白河人能畫白河侯著
集古十種摸寫上人亦與焉

で私の住所附近の赤城明神の境内にあると云ふから、元旦の散策に態と尋ねて見たが遂に見當らなかつた。行誡上人の松延源八に關する記事は左の如くである。

松延源八は水戸吉田の人なり、長崎に遊びて唐音を學びしとて、人によりて素讀をも唐音にて教へたり、書籍とては一冊もたざりき。講釋などはおほかた暗記なりしとぞ。山野邊氏其人となりをきき、招きて大川町の邸にをかれ、長屋たまりしとぞ。机一ツもたで、飯櫃を圓机と名づけて其上にて書を教へらる。書きたるもの風に飛び散るに困じて、疊の下に入れたるなどおかし、或冬鮭といへる魚を人のもとよりおこせけるに、これを作るべき庖丁、まないたもなければ、柱にかけしまゝにて、やがて、腰刀をぬきて、きりてくひけるとぞ、またしらみなど出來しにや、單物を釜の中に入れて煮けることもあり、殊の外の酒好にていかなるものも酒にかへるより、同藩の者謀りて世話人を立て、俸祿をあづかりた

圖書館時事

第五回四國四縣圖書館協議會
司會は昭和十年十二月十三、十四兩日、徳島

早稲田大學

尚講習會終了後縣圖書館協會設立準備協議會
開催した。

栃木縣師範學校長 田澤次

act together. 第二九年 第一〇號 三八三頁(昭和一〇)

第二九年 第八號 二〇九頁(昭和一〇)

妙喜通神技、助作歐公集古篇、

贈大野萬年 名文泉奥州白河人善寫真

遍訪儒流便寫真、知君家法妙傳神、關東今日多々士、欲置山嵐許幾人

白雲が此事に與かつたことが此詩で知れるのみならず、其補助役に大野萬年のあつたことも窺はれる。白雲の僧名は教順と稱し白雲とは樂翁侯自筆で閑松堂白雲と認めて與へられた名で、白河の片名と松平の頭字とを合はした名である。侯の歸依の深かつたことが知れる。侯は領内に布告して此僧に無禮のないやうにと特に注意されたと傳へられてゐる。

行誡上人

芝三縁山に近代名僧が二人ある、行誡と微定がそれで、自分は二僧とも景仰してゐるが、微定に就ては他日録することにして此頃行誡の文集を讀んで見て、其の和歌の超俗高韻に感じた。上人は漢詩もよくしたが、和歌の方が優れてゐるやうに感じた。上人の和歌は敢て師承あるでなく、歌道の外から得た和歌で、和歌と宗教は上人に於

がある。嘗つて宮内省の高嶺御厨がある。嘗つて宮内省の高嶺御厨が内大輔より上人の和歌七首を示され、一見してこれは凡俗の歌よみの歌でない。これをよみし人かならず人傑であらうと激賞し、其人を尋ねんと匆卒其人の寺と名を問ふて、縁山と泉山とを聞き誤り、はる／＼京都に尋ねても其人がなく、却つて東京の三縁山で此の活佛に出遇ひ、高嶺が喜んだことが、上人自身の筆で「おかしき話」として其の隨筆に書かれてゐる。上人は高嶺に見出さるゝまでは埋もれてゐたらしいが、爾來大いに名聲を發した。今左に上人の旅の歌一二を録す。

けふは野べあすは山邊と浮雲の行へもしらぬ旅衣かな

柴人もつりするあまも海山も見なれぬをのみ見る旅路かな

見なれざる旅寢の床に見なれたる人をしみれはうれしかりけり

醉人松延源八

前掲の高僧から醉人の逸を聴くを得たのも一奇である。其人の碑が寺門靜軒の撰文

かくすること日々なりけり云々

此人磊々落落生涯を醉中に送りし一奇人也、墓は傳通院中景久院にありと、酒客は訪ふて香華を捧ぐべし。

スケッチの狂歌

川端玉章が旅次船車の中で風景のスケッチを作る要訣として門人に示した狂歌は簡にして要を得てゐる。

杉は棒 松はうねりて 木の葉點 人家「へ」の字に 海山は線

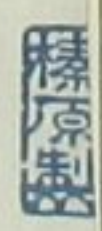
藝術家の放屁

神佛に極度の敬虔を拂つた頃寺や宮の屋根の修繕に屋根師が屁を催しても、それを放つことが出來ず、態々梯子を下りてきたかどうか、川柳には確か皮肉の句があつた筈だが、今思ひ出せない。畫家などが佛畫をものする最中、屁を催してどうしたかと云ふに、平福百穂は其父の逸事として其間の消息を語つてゐる。親が畫室で無中になつて佛畫を書いて居る最中、時に室外に出てくることがある、何んの爲めに出るのかと思ふと椽先きに出て一發放つて衣服を振つて亦畫室に入るとあるが、無邪氣の活の

金家が貴君に鍊金の秘傳を教へてやらうかと云ふと、此畫家は「二十年前であつたら教へて貰ひたかつた、實は私もとうに其の製造法を發明したと云ふて、畫室に散つてゐるカンパスや繪の具やブラツシなどを指さし「驚ろき給ふな私がこれ等に手を觸れると忽ち黄金となります」と云ふたとあるが、それほど此畫家は繁昌したと見へる。これなどは藝術界稀れに聞く景氣のよい話である。

木堂の諧謔

犬養木堂は有名な皮肉屋で、悪罵を浴びせて人の怒を買つたこともあるが、滑稽の間に愛嬌があるので喜んだものもある。なか／＼機略縦横で、滅多に人に負なかつた。ある宴會席上、木堂は首席に坐して傲然としてゐると、席に周施してゐた藝妓の中に奇抜な妓がゐた。木堂に酒をすすめながら、先生私に何か書いて下さいと云ふと木堂は快く諾した。妓は別室に退いて内々脱き去つて携へて出て來たのは、ぬくもりさめな腰巻であつた。流石にそこは木堂だ、敢て首面を



丙子老翁録

(二)

養風生

集古十種の隠れた編纂者

白河樂翁侯の集古十種は谷文晁が編纂したやうに云はれてゐるが、實際に於ては多くの人が與つたのであらう、それ等の人は皆下積となつて一向に知れない。あの書物は當時に於ては大出版と云ふてよいものである。上版された外に續篇とも見做さるべき稿本が立派に表装されて松平家に藏してあるのを先年拜見したこともあるが、全國に亘たり各部門の物をあれほど蒐集するには、なか／＼人手が多くかつたらうと想像されるが、文晁門下の者が諸方へ出張したやうなことの外、これ迄編纂に與つた人は知れなかつた。然るに秋田の人で白雲と云ふ僧が樂翁侯の知遇を得て此の編纂に助力した事を初めて知つた。此僧は南畫をよくするもので、樂翁侯に知られて、白河の常泉寺の住職となつたが、侯の内命を受け、諸國を遍歴して諸社寺の寶器書畫の類を摸寫し、古碑古鏡古瓦の金石類をも蒐集したと云はれてゐる、當時此僧に會した菅茶山は左の詩を詠してゐる。

贈白雲上人 上人奥州白河人能畫白河侯著
集古十種搜索摸寫上人亦與焉

で私の住所附近の赤城明神の境内にあると云ふから、元旦の散策に態と尋ねて見たが遂に見當らなかつた。行誡上人の松延源八に關する記事は左の如くである。

松延源八は水戸吉田の人なり、長崎に遊びて唐音を學びしとて、人によりて素讀をも唐音にて教へたり、書籍とては一冊ももたざりき。講釋などはおほかた暗記なりしとぞ。山野邊氏其人となりをきき、招きて大川町の邸にをかれ、長屋たまりしとぞ。机一ツもたで、飯櫃を圓机と名づけて其上にて書を教へらる。書きたるもの風に飛び散るに困じて、疊の下に入れたるなどおかし、或冬鮭といへる魚を人のもとよりおこせけるに、これを作るべき庖丁、まないたもなければ、柱にかけしまゝにて、やがて、腰刀をぬきて、きりてくひけるとぞ、またしらみなど出來しにや、單物を釜の中に入れて煮けることもあり、殊の外の酒好にていかなるものも酒にかへるより、同藩の者謀りて世話人を立て、俸祿をあづかりたり、入用のこととて酒の外はなし、紙に酒一合と書きて世話人のもとにやれば一合の代りおこす、みづから徳利を袴の下にかくし、買ひもてかへる、これにて足らぬ時は「又一合」と三字を書きてやる、

飛錫浮杯動歷年、彩毫到處壯山川、更將妙喜通神技、助作歐公集古篇、

贈大野萬年 名文泉與州白
河人善寫真

遍訪儒流便寫真、知君家法妙傳神、關東今日多々士、欲置山嵐許幾人

白雲が此事に與かつたことが此詩で知れるのみならず、其補助役に大野萬年のあつたことも窺はれる。白雲の僧名は教順と稱し白雲とは樂翁侯自筆で閑松堂白雲と認めて與へられた名で、白河の片名と松平の頭字とを合はした名である。侯の歸依の深かつたことが知れる。侯は領内に布告して此僧に無禮のないやうにと特に注意されたと傳へられてゐる。

行誡上人

芝三縁山に近代名僧が二人ある、行誡と徹定がそれで、自分は二僧とも景仰してゐるが、徹定に就ては他日録することにして此頃行誡の文集を讀んで見て、其の和歌の超俗高韻に感じた。上人は漢詩もよくしたが、和歌の方が優れてゐるやうに感じた。上人の和歌は敢て師承あるでなく、歌道の外から得た和歌で、和歌と宗教は上人に於

かくすること日々なりけり云々

此人磊々落落生涯を醉中に送りし一奇人也、墓は傳通院中景久院にありと、酒客は訪ふて香華を捧ぐべし。

スケッチの狂歌

川端玉章が旅次船車の中で風景のスケッチを作る要訣として門人に示した狂歌は簡にして要を得てゐる。

杉は棒 松はうねりて 木の葉點 人家「へ」の字に 海山は線

藝術家の放屁

神佛に極度の敬虔を拂つた頃寺や宮の屋根の修繕に屋根師が屁を催しても、それを放つことが出來ず、態々梯子で下りてきたかどうか、川柳には確か皮肉の句があつた筈だが、今思ひ出せない。畫家などが佛畫をものする最中、屁を催してどうしたかと云ふに、平福百穂は其父の逸事として其間の消息を語つてゐる。親が畫室で無中になつて佛畫を書いて居る最中、時に室外に出ていることがある、何んの爲めに出るのかと思ふと椽先きに出て一發放つて衣服を振つて亦畫室に入るとあるが、無邪氣の話の中にそのつから無量の興味がある。

畫家の鍊金術

藝術家は東西共に貧乏と凡そ相當が極まつてゐるが、稀れには除外例がある。古るい洋畫家にルーベンスと云ふがあつた。鍊

ては一致してゐて、普通歌人の及ばない所がある。嘗つて宮内省の高崎正風が、杉宮内大輔より上人の和歌七首を示され、一見してこれは凡俗の歌よみの歌でない。これをよみし人かならず人傑であらうと激賞し、其人を尋ねんと匆卒其人の寺と名を問ふて、縁山と泉山とを聞き誤り、はる／＼京都に尋ねても其人がなく、却つて東京の三縁山で此の活佛に出遇ひ、高崎が喜んだことが、上人自身の筆で「おかしき話」として其の隨筆に書かれてゐる。上人は高崎に見出さるゝまでは埋もれてゐたらしいが、爾來大いに名聲を發した。今左に上人の旅の歌一二を録す。

けふは野べあすは山邊と浮雲の行へもしらぬ旅衣かな

柴人もつりするあまも海山も見なれぬをのみ見る旅路かな

見なれざる旅寢の床に見なれたる人をしみれはうれしかりけり

醉人松延源八

前掲の高僧から醉人の逸を聴くを得たのも一奇である。其人の碑が寺門靜軒の撰文

標原製

金家が貴君に鍊金の秘傳を教へてやらうかと云ふと、此畫家は「二十年前であつたら教へて貰ひたかつた、實は私もとうに其の製造法を發明したと云ふて、畫室に散つてゐるカンパスや繪の具やブラツシなどを指さし「驚ろき給ふな私がこれ等に手を觸れると忽ち黄金となります」と云ふたとあるが、それほど此畫家は繁昌したと見へる。これなどは藝術界稀れに聞く景氣のよい話である。

木堂の諧謔

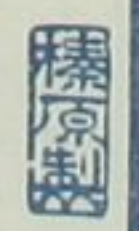
犬養木堂は有名な皮肉屋で、悪罵を浴びせて人の怒を買つたこともあるが、滑稽の間に愛嬌があるので喜んだものもある。なか／＼機略縦横で、滅多に人に負なかつた。ある宴會席上、木堂は首席に坐して傲然としてゐると、席に周施してゐた藝妓の中に奇抜な妓がゐた。木堂に酒をすゝめながら、先生私に何か書いて下さいと云ふと木堂は快く諾した。妓は別室に退いて内々脱き去つて携へて出て來たのは、ぬくもりのさめない腰巻であつた。流石にそこは木堂だ、敢て苦面を作らず小言も云はず、平然筆を揮つて「觸處生春」の四大字を書した。一座は之を見て妙と稱した。妓も何等か思惑があつてやつたことであらうに、木堂は其裏を搔いたので、顔負して滿座に冷かされた。

○ 貞の母即ち慰するも二三の月ナホレシの條を讀むる
ナホレシ條を讀むに後にもその時、後人の絶きまのり此
英雄條にあり。

英雄ともの、侍る人の善とを絶利と免前潤節とし
めし、またかく、後ある割引を、英雄條を讀み、その
ぬ。

英雄の、若の時、英雄の、英雄の、英雄の、英雄の、
夫人の、若の、時、英雄の、英雄の、英雄の、英雄の、
日英雄の、若の、時、英雄の、英雄の、英雄の、英雄の、
ナホレシ、二十五年、八月、一日、あり。

彼人の、若の、時、英雄の、英雄の、英雄の、英雄の、
に、困ん、ナホレシ、二十五年、八月、一日、あり。



を、忘ん、ず、情、の、の、論、の、の、論、の、の、論、の、の、論、の、
き、他、の、ナホレシ、二十五年、八月、一日、あり。

ナホレシ、二十五年、八月、一日、あり。

九、か、伊、大、利、征、服、其、他、降、服、四、十、計、一、現、在、一、ル、要、措、武、將
の、の、官、守、珍、く、一、ハ、才、略、の、の、の、の、の、の、の、の、の、の、の、の、

「此の政治的手腕が如何に優つてゐると云ふことは、決して
一に不あはしき。」

英那の主身、何れも同く此を以てありて、其の進退のよし
がある。アノ者ニ才がある、冷笑がある、洞見、ツツンと
伸びてゆくのが英那である。ナポレオンが大軍を率へて
伊太利を征した時、その部下は、千人同心の服
と偽り、近きものには、居らうといふといふが、常々ナ
ポレオンに操縦する裨将連が先づ將軍を感服
し、その軍の侮を失かんといふのである。

ナポレオンが佛をよみ、舞臺に登つた時、革命の古時、あつ
た。即ち英那の起身、その時といふ得るが、あつた。ナポ
レオンは敢て深く革命運動に参り、自ら外征し



從事し、その彼を他日佛革命の主権者にして、そのハ
好都合があつたといふ家、評しもある。

革命後の政府、五人の長官が政治を執つた。保一院一が
多く時々失態もあつた。ナポレオン此の長官政治の下
を控へる將軍として、連征を演ぜ、伊太利を一身古撰
太利等と敵のせいの實に捷利を修し、このが身古撰
のを費し、故に本國の訓令を待たず、和議を修し、和し
敵あへき時の戦ひ、百戦も、身外交的交渉の本國と
概ね掃蕩して、手に握り、ツツンと行つた。

斯の專横の下に、本國政府の是として、所が其つたが、
あつた、何んぞとて、彼人の死を、勝つた、日英大の戦
利、其のいどし、佛蘭西へ運ばせ、集め、集め、

併四政府七十ポレランの領格を答めんとすることか出来な
らうた、夫の意見を答めるに力の本四は無つたの
であらう。

併せて西本をびじに配したるナポレランの武勳が致り
編むべきかあるのむ、此の將軍が本四を帰來したる
まに推し奉るべきことか多いかと云ふ氣遣ひん、且長官
の教養主義を取つて、成るだけ本四を戻らうとい
ふは進んで、彼方の進退を操るもしてあることを
し。埃の速に心も折くこと生れぬ、ナポレラン
獨りかぬんじやのに、よもやういふと史家の論して
彼人の伊太利協約をやりと民衆の経験があらうか、埃
亦協約の政法をやりとの施設に元々へきことかあつた、
彼

協約

んの武將のあつた、亦埃の家りもあつた。彼人の埃の國運に
まづく時、あつた、民衆に意見をもち、その折を折る人
を同行し、詩人をも遣はしたと云ふ人もある。彼人の計画の
いの士雄大いある。彼人の其の海将子にその方の佛の領
軍人三部をよつた、ナポレランは埃の國運の色
をもち、敗戦の情報を得た、八日目に埃の國運を
倒したる、その人、彼人がエニバを脱出した、その後
に、あつた、不見儀、無罪の本四を着する、ことか出来た。
彼の人の愛人の四人、その人、本四の故人があつた、人物を
要する時、あつた。五人の長官が退任した、ナポレランが
終つた、彼領に奉りえん、併し三人の彼領の内、一人の
であらう。

ニコセヒンと誰婚後ナポレオンは露國の皇妹と結婚せんと
欲ししが露女は手成りせず拒んじりて俄國の皇女マ
リ―ルイガとの結婚が果せんとんが成立しルが大方の
ナポレオンの自尊心を満足せせぬ。殊にナポレオンの妻
が有り、此皇后の必らず子が産んじりて期待が出来んか
らあつて果して皇子が産んじりてんが皇位継承の上ナポレ
オンが大方の期待をうけ、再婚もこのが爲め生じりての
から、ナポレオンの満意に止りて、皇子を露國馬王と
呼んじり

皇子が産んじりてんがナポレオンは七万里の露國まで遠征
を試みけりし大難件を生じりてんがナポレオンは甚
剛に此婚しつて後世の歴史家が稱せしと居りてや

夫、ナポレオンが敗るる事ナポレオンを思ひまつたの心せり、亦切
名心と馳せし輕率にりて、ナポレオンが改めや
出してわい大津封鎖を大成せし、露國との争を愛し
るを得るる大兵を以て露國に臨み、ねがはるる、
ナポレオンは打撃の敗れ、戦ふを期せし、必大
和を得るるものと信じりて、大兵を相率露國の奥地に
入るる、
此ころが、ナポレオン一生の錯誤也、取り扱ひのつら
い大失敗を犯したの心ある

此後ナポレオンの動り、兵六千萬、是が懸軍
七〇万里の奥地に入り、冬期、泥濘と戦つた、露國
の奥抵抗の軍略を取つた、
露國の軍略を取つた、
露國の軍略を取つた、

あき所を焼き掃へて、物資を得る道を杜いたす。ナホレラ
ニは是の古者高きうま蓋に道人が遊にそる。まむ
の比こい佛本心を修むる百鬼出さけを又るとこ、七人
に改り無く金市に終り火災を罹り、ナホレランはクリ
ムリニ宮殿に坐し天子の如く交上り都市を司る
外はうららた。ナホレランは困憊の場向漸やく政體
の表を隠す跡をめぐらすことを得た。其の比本國との
通商も漸く、将士兵卒の飢餓も甚く、塔状のナホ
レラン自身も七十七日間徒歩をのり、けり竟死の間
の一生を得たと云ふ。又、大敗のあつた。
ナホレランが不敵な五かゝ本國に陥つて以来の國勢は
係りあつて危ぶあつた。皇后との関係が頼み切つた頃



國より佛のぬきと舞臺をよむつた。聯合軍が遊に
四里にわたる道つて、皇后とわらわりの御曹が奪ひつた。ナホレ
ランは退位を強くえんた。ナホレランは是を諒して、皇子
の地位を佛僧に譲り、比が死に打りんうららた。流石のナホレラ
ンも末路を思ひて毒を仰いだ。茶碗が古らつた。其の利かま
かの比、ナホレランは遊にえんた。島に拘禁し、身とあつた。
が、彼人の島を脱して本國に現れた。本國に彼人を歓迎
し、比が保し、王宮より皇位を皇子に譲り、つた。彼人の英
國を相争ふ戦ひのあつた。比が、彼人を終り、最後を
飾り、大なる海軍の收斂を演じた。ウチートロウ
格の收斂がある。えんた。ナホレランは格の名を成して
め、えんた。比の佛僧が、度々、格としてゐた。
海軍の将士

のち、ナルリンを討ててやつたにせよ、得たものはあつた
その敗北の結果、ナポレオンを捕虜として英國に送
つた。ナポレオンは幽閉し、五年間島生活をやつた。五
二年、彼は没した。彼人の島生活は悲愴であつた。或人
と危険な悪漢と對する如き最期の監視が附せん、バラ
ツリ同前の家、此の皇帝を幽閉した。英雄の末路の
抵抗は、この頃の事であつた。

ナポレオンの葬儀は一千八百四十年十二月十五日、行
なれた。この世界の偉大な葬儀は、ロレヤは稀るの壯麗な
る大祀する権と字を記した。セイヌ川のほとりのア
グアリの橋に、其の永眠の地を定むる。
彼のハオの二皇后は、皆かみ且の其子をして皇位



を継いでゐることをかゝる事、その事、ナポレオン三世ナポレ
オンを現出する事を得た。その後のナポレオン三世は
セフインの連子オムタンズとの間に出来た。甥のル
ナポレオンはあつた。

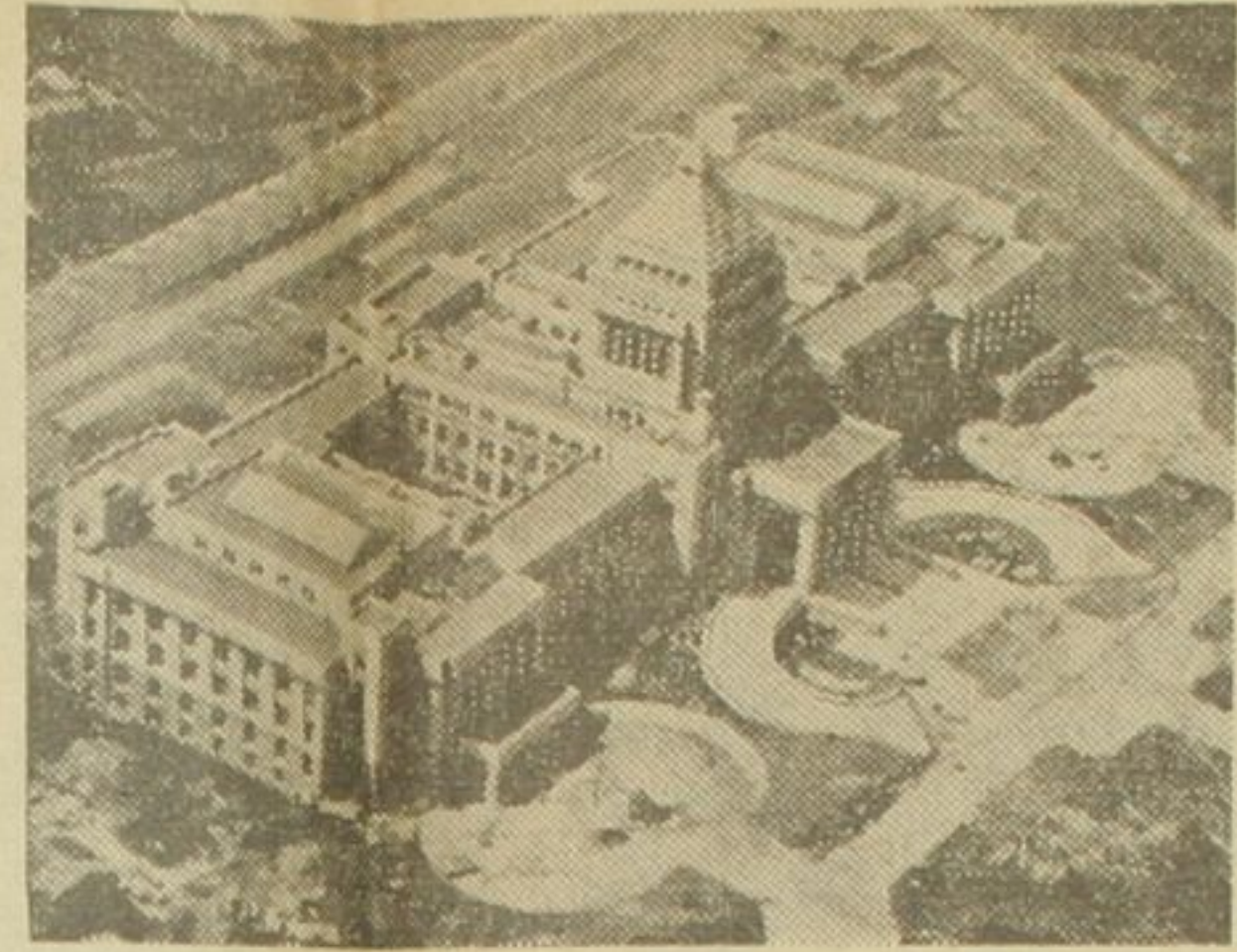
ナポレオンのセントヘレナの島に於ける五年間の彼の回顧は、考
く時として彼人の時を共にした。彼の人生は、その回顧
史を致さるる事、其の勤め、その体念が成つた。その
らんを高くして、その監視者の検閲を在る事、その
まんが、島から出た二三日、筆記がなせられた。その
其のそのそのそのそのそのそのそのそのそのそのその
とせん。

ナポレオンの島の説、西洋のいつの時代を流す

貴衆兩院間が二町 豪壯も不便ぢや

老議員尻込みの新議事堂

肅正議會で蓋明け



十一日は帝國憲法公布第四十八周年の記念日だが、野田永田町の新議事堂も起工以來二十年の長年月を費して、この夏落成する、今秋盛大な落成式を挙げた後、年度の「肅正選挙」で選出される議員を擁して、来る特別議會の後今秋第七十議會がはじめてこの新議事堂に召集されるわけである、新議事堂は、去る明治二十三年初めて議會が開かれた當時から今の永田町の敷地は選定されてゐたが、幸町の假議事堂で遂々三十五年過ぎた、今度の新議事堂は大正六年七百五十萬圓の豫算で本建築にかゝつたが何しろ工事材料は全部國産に仰ぐといふのだし、物價は次第に騰貴し工期も二十年といふ未曾有の長期にわたつたので工費も最初の豫算の四倍に近しい千七百五十萬圓といふ巨額に上つてつた、新議事堂は既に近代建築史上に輝きすべきその雄偉な大體工事を殆ど終つて内部は調度品の備へ付け、外部は區畫と舗の工事を建てるのみとなつてゐるが、内部などは窓の守備が一部屋に一分割したとしても全體を通るのは五時間かゝるといふ廣さである、殊に各部に附した獨特の大彫刻は當時不景氣風に隠はれてゐた木彫界の果敢を取もしたといふ大工事なのだが一段落ついて此八月には大蔵省から引渡しを受ける【寫眞は議事堂全景】

今秋大落成式

大蔵省、貴衆兩院とが合流して我が國最初の議事堂落成を歴史的に意義付ける催しを行はうと協定の結果、大體来る十月下旬か十一月上旬、元前貴衆兩院議員を始め、建築に協賛を興へた議員の家族その他建築関係者各省の役人などを廣く招待して喜びを満ち歴代議會關係書類の展覧なども行

速記

者の控室から委員室の遠いところでは通りつづの七分ほどかゝる現在速記者三組で十分交番になつてゐるがこのためもう一組を増やして四組にしないと交替の時間にかゝつて速記が中絶することになつてしまふ、守備も兩院それれ六十五名づつ増員、衆議院は守備の数が二百人程になる
新議事堂のも一つの價目は議場と

食費が廊下を距て、向ひ合つてゐること、食堂の匂ひが神聖なる議場へ漂つて来る憂ひ十分とある、次に大きい弊に不便をかこつてゐるのは議員の控室、何分にも

議員 (衆議院) 三百八十八人時代の設計だからこれが現在の四百六十六人となると、議場の方は何かか収まるとして控室の方は從來と同坪数のところへ、壁の厚さだけ狭くなつたわけだ、それに現在の様に二十人、三十人と詰め込むには、

この議事堂は、日本の政治の中心となるべきものである。その建築は、日本の文化と歴史を反映するものである。我々議員は、この議事堂で、国民の利益を守り、国家の発展を期す。我々の使命は、国民の信頼に応ずることである。我々議員は、この議事堂で、国民の利益を守り、国家の発展を期す。我々の使命は、国民の信頼に応ずることである。我々議員は、この議事堂で、国民の利益を守り、国家の発展を期す。我々の使命は、国民の信頼に応ずることである。

この議事堂の建築は、日本の文化と歴史を反映するものである。我々議員は、この議事堂で、国民の利益を守り、国家の発展を期す。我々の使命は、国民の信頼に応ずることである。我々議員は、この議事堂で、国民の利益を守り、国家の発展を期す。我々の使命は、国民の信頼に応ずることである。

の政府が、
謂はんとき、
刑罰を、
士義人に、
施すは、
か四法の、
罪人と自か、

又二愛人を得たことゝ愛さるゝの房 漱哲士のナホレ
オニ侍る左の如くそのまゝ

ポーランドの婦人の美しき心を動しに、ワレウス大
人との恋愛種流儀にヨセフィンの物語以後、彼の生
活は優雅な柔味を興くる筈(の)といふが、子のそ
の彼の流儀が、あつたといふこと、心解しとるが、
此の返念が解得た、此夫人の彼の為め、男子を
先づか、彼の父性の目覚めたる

えりといふと彼のまゝに、ゆるゆると、予がある、
どうするに、あつたか、此者も、彼の所か、まゝい
の淵に乗ると、正の富子親の句集を、予うして、復
子親の、あつた、高時の、行ふ、日本に、日々、吟詠を



解いたのを、後人たこと、あるが、其集を、後人の、
か、如く、一、且つ、詞、且つ、歌、予、あつた、
又、あつた、
又、あつた、

布衣の歌を回

風ひくも、肌、寒き、吹の、胸の、穴
古き、夜や、孔の、死、三、四、志
古き、夜や、孔の、死、三、四、志
楓木らの、話、古、徳、を、危、古、
冷

杉を、七、日、八、や、か、に、曾、我、の、墓
や、寒、み、灯、の、り、る、古、七、き、
徳、の、民、の、り、三、水、崎、ま、き、夜、寒、

大あふ

大寺の道もとに寝る夜宮を

〃〃

牧師一人住居四五人の夜宮を
提灯の刷へるよ夜宮を
小坊主のひとと鐘をく夜宮を
大寺にいとる局も夜宮を
と合の鏡よも言の夜宮を

最上川 残照

道帆の風は日暮との残りけり

秋立のや瓜も茄子もえりぬ



秋来ぬと柱の拂子舞きけり

白き花赤き雪 秋立ちにけり

鐘の音の輪をまゝと来る夜宮を

十六夜傳の回

さびしきやどの顔見も秋の暮

王子格祝祭礼

杉高し秋の夕日の茶衣も

二月巻

秋や一十年のはとけぬ
行秋や杉葉もとあきぬ
丸人が来る飯玉の首もあやもあきぬ 秋

陸奥り柳のゆき

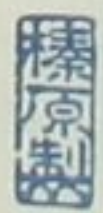
昔に吹くや五十四郡の秋の風

新酒

狐啼く新酒の酔のさめけり
更く一杯の新酒をおもむる
吾酒を以て酒の友を得るは
思ふこと新酒を酔うてはけり

薬山子

薬山子も目鼻あつけり浮世は
あふか中に心と思ふは薬山子
古よの酒を薬山子の文を
十年の紅態今に薬山子 白朝



唐桑に昔中うはく湯あか

・朝白や毎からんも花細し

唐辛子おのん秋のおそろしき

唐辛子一ツ二ツのちくあえ

空家の一畝あかき唐辛子

是哉の好くはけり唐辛子

唐辛子長唐辛子をちめけり

・夏のきく女形も唐辛子 唐神にきく

木槿

木槿咲く土手の人馬や酒田島

木槿咲いて里の社の芳流るる

木槿垣人も通らぬおるゝ子
十軒の長家とてうすく木槿ゝ子
寺町の片側さびし木槿うす
、葎入や皆見え江の木槿垣垣
道は比の木槿のたてま埃

凍の凍

、とも行く灯や燃えんと福豆加袖

病中

、悪いあんどまの女んが雪に我病を
庭の雪えうや一厨の行き亮り
、或はな雪の深さを尋ねけり
病ち入る戸あけと見え、吹雪が



階子あけく上るの雪を一目見え
起せと名腰かぬけんか雪の菊
時雨さや葎弱冷を胸の上
時あさや腰湯ぬるまを一の聲
寄しえと鏡中、人わら宴し
飲くわぬ胸にむくや鉢叩
詩勝枯んて病骨を漢字満園
まゝ生きたと傷後とに叱らるゝ
菊枯れ胸骨のたて主人が
、くちをしや春の筍おあま 前と題して
此の春を鏡見ることさるあつけり
雪の降りけとも胸の上はぬらるゝ

雪の梅は下痢する故宮のま
椽端に又正の雁の名残るる

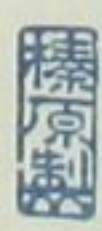
清女

清女あやや海子日く茶を喫し去ん
金時七緒も来てのま清女は
馬上より手綱ゆるゆる清女は
龍人の名をつけて行く清女は
些細にあらる流るる清女は
昔清女の馬の口をさぬけり

須磨

曉や白帆すさ行く杖操のふり

四首



うもよあを掛けし衣桁や
夕まに打たれし、舞の歌うか
山音さう夕まの雲のまぬか

向島

涼しさを川を隔つる灯の持乳
秋はるる沈むとて終るる行く
うれしき涼しき須磨の暮しき
まが城神と見え

・のむく目は一千年の風流

白河佐城氏城址

海にさか昔の人の汗のあと
後鋤かき

・ 釣合に九代采女ゆき梅木氏

永き日とあぐらをかきなる宿禰守

・ 吉原の市に日永し文卜者

・ 高野の山清くえんせし塔一つ

・ 宇流下つ葉つゝ舟や夕かすみ

神田大竹

・ 陽炎や三千軒の家のあはれ

上り笠

魚肥きう七十二瀬上り笠

法隆寺父君の暮るん坊でい

畑打やこころあはれは打のこせ



皇太后陛下所拜儀を拜みせり

鈍色の命婦の袴春ささり

上り

花に群衆松の葉白き俣あふ

柳身う舟持の牛の二三ひき

・ 地さくわ三丁籠の上り船

・ 釣籠り宮にぬんを梅の葉

・ 花さいとぬい出する人皆素

内子

人里し肌月夜のをあふ

女良

菜の花のやはら三条四葉

鐘食大佛

・大佛に勝るべき深しきよ

書後

・すいーさを回文にうらな守

能事者大

めいれと七一原いらくあや雑煮餅

奮戦若足と文れ一肋骨に申をす

己心一とや蒲團にのぼす道のりけ

千鳥船沈没

・七のふり河豚にくはく一遊一とよ

菊

人賤しく菊の候とせと一けり

・菜の花を手に都春の心あり 自慚

菊

年々い菊ん思はん思はん

最早鏡がへらしたる菊の長からとて思ふ

今このうき世の物や世ならぬのころあり

踏心頻りに起る其に長年の世を何

りも成布れぬん天井もいふらさるる

と紐につく

・病床の成者も秋の錦一とよ

冬川や家鴨四五羽に星とぬる

冬川某肩ついはむ家時
門は夕残る冬時の伽藍

十年の昔子毛のるき毛布

元光院

山魁に木魁谷くへ松の月

所感

我の寄信り月中の桂折えん

生れとまゝ子をまひる人

月まゝに二〇の月とあきさの月

鳴

まじい淋しまじい淋し汗の時



セリキレイの番兵と行くや石佛

夕顔の都なまうの女

夕顔の女湯あそびあかしくこま

人くつのもつ死に七七の夏

千鶴の句をやねとよ海し只の好ま、そん句を能とせん
と心こころのうらみあし知作あるに主能に返す又家親
に依る個性を以ていふに能いぬがある。此を附して
つひ市のあそび感あそびの件 とうとう(昭和十二年二
月上段)

すまて枕頭堆をとりて、自分のちもまふこゝの回
書の數かゝるんが直ぐ、無聊と感得する。役主の
御甲から雪中の某語を字のせまつたのでも凡
を破つて一吸をせしめたる。毎口おせあはしく教束す
るふ例であつた。まゝか去来するの心娘に代り
を扱ひ用もするの物を買つて氣をぬかせること
もあつた。

僅にこのおりの疾風のせ生活の慣習に、毎日の変化を生ずる。
其の度々に必くおしとまも、良心に限らざる却つて悪化す
ることもあつた。自分か捨せたいと思つてのみ、お習を
する。ことか斯く感する生ずるから疾風の此意味を
一概に感するまゝ、自分の生涯を捨て可なり長く病床に



の長年

此十年間生に泣きたることあり、入就は月川の流れること
釋りの雲霧を愛はれたことあり、まの物く又悪習を脱し
たけんが、若い時の強烈なる病態に一時おし得ても、河せま
元は病つてくつた。困る、夫は病の揚句をど家人に戒め、あ
の大妻の時と思ふも、後まの生涯をせぬと云ふれが、二
ヶ月も病つた。元は病つた。習は強ち衰し難くまの、
後病つてを押制することか甚難い。
○昔の年賀も今と可なり趣の似た所かあつた。川橋を
渡ると一夫

年如狀笛守をつかめの如き
上下の言はありはやく年如狀
酔つたのかつけかけをする年如狀

あかひのちを云ひぬばかうの年如状
年礼の川邊にひびきてはぬらう

其他の川柳をそつ天治の侍志まき

益のちめさ向のいしめ

しく餅いせうれと構ひあふぐらう

鉢巻がめあゝ病あふ向ひ池

六尺に切んが氣のある細絡編

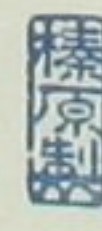
餅をやくにほびて上戸いとまこい

三味線屋かきう出すかと思ひんの

呉服店きせうを廻す不日急おと

しくきんさうしうん千代一人えう

おーのいのお供はなんし行きはがり



逃げのいれ腰え前をよしく合せ
かり腕をいし、檢校やの氣あし
予を抱けば男は物がそいあし
我かすいれ男の前をわけぬけ

○同じく線であうと味のあうのと無いつうある味の
ある線が前、術倫で香くさるもの凡俗である。
蘇轆の心はつは異物を主依る圆形に較正形に
あつけんども、**片**うは味がさうい。名人が蘇轆を用
いす、平むりス平に**片**器物を較正形にさういかに其の
線ええんさ云いぬ味があつ。**片**香しく云ふと線に心家
の思惑がたつるもの、心家の物神が打ち込んぬる

西洋の像は機械的で幾何学的であるから整正にあらわす
又味のある骨格なくつて肉を走し、賦氣をさすこころ
くしもの、レをやうてかまひ、グレースの軌の野、
い、日本の能や舞踊の西洋の表へて情結のあま
の、像が藝術的であるから、事など。

○科音が通んてくると人の道こそ術の許さることを
感ずけ材料を採録するやうなうてくるが、実
ハ非科学的詩的であるが、採つてよいといふが、い
らもある。現在では材料科音の許さるゝのが因
縁的と採んてゐる。短歌の声あるといふと、
ことや、富草が聲と化すこと、信をいふと
考いらんたうして、
聲が鳴くとせん、
花

富草のこゝろをいふこと
花

が都もわも、
さんであるは、
必し、
の、
祝ひ、


稲在あま山子、射ん海入る。

○凡人も、
と、
あ、
箱、
世、
日本、

戦争はあらゆる成分を必要とする。重工業、機械工業、化学工業等を初め一切の生産事業をこゝに集結して、初めて「戦争」は成立するのである。大戦で、英獨佛その他歐洲大國は何れも國富の五割内外を消耗し盡したがそれは各國の物資を「戦争」といふ偉大な熔鑪に投げ込んだことを意味し、あとには何んにも残つてはゐない。戦跡の廢墟にちらばつた鐵のかけらや、焼け残りの被服、錆びた鐵條網の塊、そして骸骨に、この驚くべき大物資の消耗を計ねるべくもないのである。

ヨーロッパ大戦が「海戰の卷」を比較的に缺いてゐたために、最も金を食ふ軍艦の海底消失記録は微するに足らぬが、それでも、ドイツ潛航艇のために、積載物資諸共海底の藻府と消えた聯合國並びに中立國の船は總計一千二百萬噸に上つた。その内イギリスの船だけでも七百七十五萬噸で、積荷を合せて水神への奉納額七十億圓と註されてゐる。若しそれ航空機に至つては、危險率の高いだけ、耐久力の低いだけ、消耗が激甚な譯で、歐洲大戦では、戰線出動の飛行機が三割五分を失つた計算になつて居る。専門家の意見によると次の世界大戦では、少くとも一日平均五百臺の飛行機が消耗され、従つて補給されねばなるまいとのことだ。成るほど、これでは戦争に金がかゝる譯である。

たゞしかし、考へて見ねばならぬことは、企業の最好條件は常に生産品の「完全なる消化」にあることである。而して戦争ほどその「完全なる消化」の條件に合致した大企業はないのだ。お剩りにそ



七轉
八起き……雪の上の三千回も、サロメチールさへあれば大丈夫です
スキーの旅に何を携いてもこれだけは、一本二本、三本、と缺かしてならぬスポーツ用品
五十錢・二円
薬店にあり

ルーチメロサ

の企業形態は、武器製造を主體として、横斷的に、將たまた縱斷的にすべての生産事業を網羅してゐるから、戦争による軍需品の消化は全面的に關係事業家の利潤を増すことになるのである。これが、戦争を一大企業化して、これによつて投下資本の大回収を行ふものが出現し來る譯であつて、ヨーロッパ大戦の如きは、一面人類の最大慘禍であつたと同時に、一面、軍需品製造業者の一擧にとつては、天來の福音でもあつたのである。

ヨーロッパ大戦は降つて湧いたものでなく、本質的に戦争を金融の道具とする兵器業者達がガツチリとトラストを組織して計畫的に招き寄せた商機のクライマックスであつたことを認めねばならぬ

五萬噸)積荷を食せし沈没額七十億圓
未圓から勃羅も、まう出しに軍需品の大
戦中八十億圓も上る
英のウイッカース会社、四年間四億四千
萬圓の純益を計上
佛のシュナイダー、クレソー、ハ三億の配当
を
アメリカの歌多成金、五百割の配当を
受けた
大勲中英支利政府がウイッカース会社、兵三
代として仕拂つた金一ヶ年十億圓を下
る



五萬噸積荷を今を沈没額七十億圓
未回から沈没額七十億圓

いのである。
戦争の勃發は、今まで營業見本に過ぎなかつた兵器商品の實用化であり、戦局の擴大は、販路の擴張であり、激戦は市場價值の昂騰としか彼等の目に反映しない。兵器の大量生産は殺人商品の氾濫だ。中歐の山野に流れた血河と染かれた屍山が、とりも直さずアメリカの戦争成金に「五百割配當」を取てさせ、株價の狂騰でウォール街を亂舞させたのだ。

世界大戦は四年の歲月の間に四千億圓の戦費を支出させたが、その利潤は軍需品製造業者の懐へ雪崩の如く落ち込んで行つたのである。

英のグイツカース會社たゞ一社だけでもこの四年間に、四億四千萬圓の純益を計上したし、佛のシュナイダー・クレゾーもこれに劣らず三億フランの配當を發行した。これにつらなる武器會社ブロックの荒つばい儲け振りは一々書き立てるに及ぶまい。

アメリカからヨーロッパへ送り出した軍需品は、大戦中總額八十億ドルに上つてゐるが、誰か曠古の大戦争に依らずして斯くの如き大營利事業を取てし得ると思ふものがあらうか。

武器に國境なし

世界文化の最高表章と、お目出たい學者たちに仰がれるノーベル平和賞の創始者アルフレッド・ノーベルは世界に冠たるダイナマイト成金王である。ダイナマイトが戦争の一大要素である位のこと

「武器を賣るのに人物や主義には拘らない。金を拂ふ人間だつたら獨裁者でも虚無黨でも、新教徒でも、舊教徒でも、泥棒でも捕吏でも、白人でも黒人でも、黄色人でも、馬鹿でも犯罪人でも、武器を賣るのだ」とバーナード・ショーはその作中の人物アンダーシャフトに言はせてゐるではないか。

棉花薬の發明で鐵砲の普及となつたヨーロッパで、その製造販賣の本場はベルギー、殊にレージュであつたが、一五七六年にスペイン軍隊がその國へ侵入して來た時、スペイン軍の鐵砲は總てその敵國たるレージュから輸出したものだといふ有名な話がある。

大戦前までベルギーは、獨逸のクルップ會社から一手販賣の如く武器を仕入れさせてゐたから、一たび開戦となるや、獨逸はベルギー國境を通過するに當り、先づ自國のクルップ製の兵器の邊に會つて大蹶跌を來さなければならなかつた。レージュやアントワープ

要塞は獨逸人技師の設計にかゝるもので、こゝでクルップ砲の威力が敵の獨逸軍に情れなく發揮されたばかりに、獨逸軍の策謀計畫は失敗して終局の戦敗にまで禍因を與へたのである。しかし、また獨逸軍も亦フランス兵器工場シュナイダー製の手榴弾を盛んに使つたと

は平和賞の有難味と共に記憶されるべきである。十億ドルの慈善事業資金を世界中にバラ撒いてゐて、名實共に世界一の慈善王であるカーネギーが製鐵王で、歐洲大戦にどれほど殺人兵器の生産に貢献したかはこれ亦著明の事實である。ノーベルやカーネギーが眞に人類のためを思ふならば、夙に商賣替へをしてゐなければならぬのだが、彼等は白人種特有の二重人格で、一方に殺し一方で救助を高唱してゐられる鐵面皮の所有者だ。祭壇に牛の血を供へるのがキリスト教徒なら、牛肉を啖ふ食卓で動物愛護を唱へるのも亦彼等として當然の事であらう。

獨り獨りなのは、日本人や支那人である。近頃山東の鹽が日本の軍需工業用に輸出されるといつて、民國政府が難辭をつけ、輸出阻止を圖つたことがある。これは恰も、滿洲事業の當時、某會社が毒ガス製造用の鹽を張學良へ賣つたとて國內に大物議を醸したのと好一對の話柄である。近來はまた浦鹽の要塞製造用に日本からセントを輸出するのは怪しからぬといふ非難が起つた。滿洲で暗殺列車を襲撃する匪賊の手になくてならぬ道具としてゐるのは、日本製の懐中電燈だといつて、懐中電燈の滿洲國輸出をひどく悲憤する者もある。

敵に武器を與へるのは賣國行爲と、日本流に騒ぐなどは如何にも罪がなく、確かに日本人でなければ考へられぬ純眞さだ。しかし一たび白人國家の事となると、こんな生優しい認識はなくなり捨ててかゝらば戦争のことは判断できなからう。

いふから、その點五分々々かも知れないのだ。大戦中、フランスは莫大なボーキサイトをスチス經由でドイツへ輸出した。ボーキサイトはアルミニウムの原礦で、フランスのプーバンス地方に産出するが、獨逸には産出しない。しかもツエツペリン飛行船用として絶対必要だつたのだ。一方フランス側は飛行機製造用にマグネートを必要としては、獨逸製以上の良品が見當らないので、同じく「中立國」スチスを通じて、このマグネートを獨逸から盛んに輸入してゐた。英獨逸間にも同様の取引がデンマークを通過して行はれたことを、英の一提督が暴露したし、クルップ會社がオランダを通じてイギリスへ武器を賣込んだ事實も摘發されてゐる

フランスから獨逸へシアンと炭素を賣つた事件は、戦時に一度裁判沙汰となつたが、クレマンソーの政府は、それに「無罪」の判決を與へてしまつた。

この種の交戦國間における軍需品取引は、引例に違ないほどだが恐らくその白眉と思つていゝのは獨逸潜航艇ドイツチエランドの活動であらう。彼は聯合國海軍の封鎖線を潜つてアメリカからニッケルを、自國から藥品を勇敢に取引の輸送に當つてゐた。

そして、これらの大量兵器と、それを活用するに必要なる弾薬類が如何に凄まじい威力を以て生産され供給されたかを考へねばならぬのだが、ドイツでは戦ひの最高潮時、一ヶ月平均一萬四千五百噸の火薬と、二十萬挺の銃砲、二億七千萬發の彈丸、五萬三千門の大砲と千百萬發の砲彈を生産した記録を持つのである。また大戦中、イギリス陸軍の使つた兵器彈薬費は一ヶ年平均六十五億圓（日露戦争に於ける日本軍の三十五倍）で、總陸軍戦費の五三%（同上日本軍は一五%）といふ高率を示してゐる、若し夫れ彈薬費に至つては日露役では日本軍が一ヶ年平均六千萬圓を費つたところを、英軍は四十二億圓費つたといふことだ。

英佛兩國大戦中の兵器生産總數量

イギリス	フランス
二七、〇〇〇門 火 砲	二一、〇〇〇門 火 砲
二四〇、〇〇〇挺 機關銃	八八、〇〇〇挺 機關銃
五、三一六、〇〇〇挺 小 銃	二、九四三、〇〇〇挺 小 銃
二一七、〇〇〇、〇〇〇發 砲 彈	二四七、〇〇〇、〇〇〇發 砲 彈
九、一〇〇、〇〇〇、〇〇〇發 小銃彈六、三〇〇、〇〇〇、〇〇〇發	九三、〇〇〇、〇〇〇發 小銃彈六、三〇〇、〇〇〇、〇〇〇發
五五、〇〇〇機 飛行機	五一、〇〇〇機 飛行機
五七、〇〇〇個 同發動機	九三、〇〇〇個 同發動機
二八、〇〇〇臺 戰 車	三、二〇〇臺 戰 車

この表は我が陸軍省の調査だから間違ひないところだ。一九一八年頃のフランス國內では、百三十萬人の男工と四十萬人の女工がこ

戦争は奇術の如きもので、盆上の水からでも、一たび火蓋を切るや、大海嘯を呼び起し得るのである。大戦當然を考へても、交戦國は初めからあの大規模な戦争を豫想してかゝつた譯ではない。たゞ何物とも名狀し難い力に引摺られたのだ。獨軍の五十箇師團は開戦後一ヶ月で俄然百二十箇師團に殖えてしまつたし、佛軍は五日間に四十四箇師團から八十三箇師團に、露軍は四十一日間に八十八箇師團から百十三箇師團に増加した。大戦繼續期間は一九一四年から一八年へかけて通計千五百五十六日に及んでゐるが、その前後の兵力

を對比するとき、全く以て隔世の感があるのである。即ち大戦の末期に至つては、獨軍は二百四十六箇師團、露軍は二百十四箇師團、佛軍は百廿八箇師團、英軍は當初の二十箇師團から九十三箇師團に飛躍してゐる。

戦争と武器

しかも、斯様な戦闘人員の増加は、それに隨伴する兵器その他全般的軍需品の増加を意味することは言ふまでもない事。即ち大戦初期と末期とを英、佛、獨三主力國について較べて見ると。

△機關銃 佛軍は五千挺から廿萬挺に、英軍は二千挺から五萬挺に、獨軍は一萬二千挺から十萬四千挺に
 △大砲(輕砲重砲合算) 佛軍は四千八百門から一萬七千五百門に、英軍は二千門から一萬一千門に、獨軍は七千門から二萬五千門に
 △飛行機(各種合算) 佛軍は五百臺から七千五百臺に、英軍は二千臺から四千臺に、獨軍は最初飛行船主義で飛行機をまるで閉却してゐたのが俄然千四百臺に
 その他、タンクは當初まるで無かつたものが、英軍三千二百臺、佛軍二千八百臺を持つやうになつたし、迫撃砲といふやうなものも最新武器として、末期には英軍三千門も佛軍四千門、獨軍に至つては三萬門を戰場へ引出して來てゐたのである。

れら軍需工業のために全力を擧げて働いてゐたし、また日々二十萬五千發の七種半砲彈製造のためだけでも一九一七年には九十萬の労働者を必要としたと言はれて居る。

アメリカ陸軍省は、參戰と同時に軍需品調達のため十萬以上の民間軍需工場を動員した、戦争は一朝にしてその交戦兩國を高度の軍需工場と化せしめるが、こゝに問題の主眼點が存するのである。日本や現今のロシアの如く政府が兵器廠を經營してゐる國は例外として、白人の資本主義國家に在つてはこの驚異の外なき一大軍需品生産事業が、主として民間の兵器工場で占められてゐる結果、それに伴ふ莫大な利準が、その懐ろに納められることである。

大戦中、イギリス政府がウィツカリス兵器會社に支拂つた金は一年十億圓を下らなかつた一事に徴するもその間の消息は明かなるものがある。アメリカにおける大戦成金の兩横綱は鐵のスティールと火薬のデュボントといはれるがこれらが民間に幾百といふ子會社を持ち、地曳網のやうな仕組みで生産した材料をヨーロッパの戰場へ送り込んだものだが、その儲け高は、全く本來の計算數字に革命を來させる程度の飛び放れたものだつたのである。

たとへばヨーロッパで同じ歩兵といつても、大戦當時は一ヶ聯隊三千三百に六挺の機關銃を持たせてゐるに過ぎなかつたのが、大戦後は、兵員が二千五百人に減つた代りに、百八挺の輕機關銃と十六挺の機關銃、他に二門の迫撃砲と四個の爆彈投擲器を持たせるに至つた。近代的兵器の需要は今や幾々乎として際限がない。

○自分の時々に川柳を讀んで無聊を消すか
いのち川柳の集を讀んで感ずることハ、感ずす
うまいのは、その子感ずる地くういかに、その
くいのが、實に浮山ある。自分のまゝ都を自分のこ
れまゝ保す。その一ういかに、今の如き年輩ある
つてまゝいて、その世に、世に、かゝるまゝ多いか
不審の思ふこともある。今から考へると、昔年時
代まゝの社会と、その世のを知るまゝ、川柳集
を讀んで、その世の如き。その世の如き、その世
帯のこと、感ずること、その世の如き、その世の
が果して解く得れば、あゝ、此等の皮肉の多し
人情の機微を、穿ち、其の線に、觸るれば、よか



不熟を人に知ると、あつり
控へて、春初め、と、感ずるうらやま
笑ひ、そのあつり、田舎の、始、あつり
前、あつり、あつり、あつり、あつり、あつり
抱ひ、あつり、あつり、あつり、あつり、あつり
相、あつり、あつり、あつり、あつり、あつり
人を、あつり、あつり、あつり、あつり、あつり
道、あつり、あつり、あつり、あつり、あつり
野、あつり、あつり、あつり、あつり、あつり
ま、あつり、あつり、あつり、あつり、あつり
山、あつり、あつり、あつり、あつり、あつり
検、あつり、あつり、あつり、あつり、あつり

おの洋切のむすけを解く難く味は難いよのひある
いくら年輩かあるを世の所謂木蘭訥漢や
唐姜来ると云い、面々も後念ひ復命して少
しして今時の出来事のことか多とあるの、自身の
今んぞ観いむの別天地であるから此川柳を解
し得る人いふぶの人ひ多し昔昔人である、女ふ多し世
流りをし人ひあるとむも。そのふきで女くらか社
合の暗黒面の花も川柳で描こえてゐる、若しある
人々の世もむか否かを 験せんとするもの川柳の
ある句を試験詞題に出すかよふ、直に昔人が
世もむしとてあるか、はと疎いか、判し得るひある
うら勿論川柳の中にも過さぬ比時代のことが偏



まゝである、このかめくさる、まゝ春の陰くさるして
いふ十はかり春のけさる川柳いふと、意味ある
ていささか、と聊さうして今もむ所が、もつ笑
資とるすの、まゝと思ふその、板草、むある。

紙雖いころは時も夫婦の
歪をまんぢくふあこ、してはげ
若旦那とちいれを、お出れ
あく、刺女はくが、まきし
言ひぬけを、みんぬ、おは見えへん
つめ、息子の、福の神おつ、おが
おの、おの、ああ、おの、いひ

つらぬ振りまゝに娘の昔をさう
にに切らぬ娘を借あくとまうか
かんあやぐのやうに目をせまる色娘
張り物ゝ嫁の袂にぬきかきり
あはれ千金かたはれの嫁をとり
まの古をまふ世と後家の云ひ
荒い身心安否命の後家と云
後者を先くしにのび後家としん
武士の喧嘩に後家が二人出来
若後家はあがたくすいの異時者
お妻の七と民間に人とさう
お妻をとつこのけその御けんやく



お妻のうゑはかつね娘さう
香えの早く満ちぬか園者
後校の妻新もはねのこと
一葉中さんともあはれこさう
おろくもむね痛ふつと御大病
俗名心呼べぬ薬種にあくさう
神農のふり版も下りてえ
人冬に行長版もえてもらや
百姓瘦か喜の肉とさう
御礼をなとぞん心と園家え
千のひらゝ四のせまる穀園
回家を曲つた所の脈はり

ナポレオン

市島 春城

世界の痛快兒と云へば、先づナポレオンを推さねばなるまい。ナポレオン程多くの人を殺し多くの國を荒してサン／＼亂暴をやつたが、其割合に悪人呼ばはりもされず、佛人など美人に魅せられた如く、内實は困りながら強ち嫌ひもしなかつた。畢竟彼れに人氣があつたからであらう。其の人氣と云ふは、快の一字が彼れの言動のすべてに附き纏つてゐたからであらう。

雪中アルプスを越すなどは不可能とさるゝほど危険であるのに、ナポレオンは此の峻険を跋渉して何んと云ふかと思ふと、冬期のアルプス越へは俺れの常識だと豪語した。彼の常識は實に變つたものだ、此の常識に倣はんとするは難いかなである。彼自身もある時「危険思想とは常識を實行に移さうとすることだ」と云ふたが、如何さま冬期のアルプス越へを常識として、それを實行に移すことは危険に相違ない。併し彼は常に「危険に生きよ」と云ふを心條としてゐた。即ち虎穴に入らずんば虎兒を得ないと彼れは確信してゐた。彼れの成功も失敗も一に此の心條に繫つてゐた。彼程危険を何んとも思はず、どんな危険に直面しても恐怖しないものは無かつた、と、當時彼れの麾下は云ふたが、實は彼れとても人間である以上恐怖の情の無い譯はない。唯彼れが危険を恐れな

い所以は、恐怖を掃蕩する程の研究を怠らなかつたからである。彼れ程何事に就ても周到の研究をした武將はない。

彼は常に云く、「余は事に當つて頗る沈思する、そして成案を練る、余が如何なる機會に投じ、如何なる案件を處しても過なきを得るは、これを處するに先だち、場合によつては可なり永い間事件を考量し工夫した爲めである」と。斯くまで事を研究すれば實は怖るべきものが無い筈である。畢竟恐怖は物の認識を缺くからである。多分那翁の字典には「恐怖」など云ふ字は無かつたであらう。

古來英雄には粗豪の人が多いが、此英雄は其選を異にして頗る細心であり周囲であつた。其戰鬪に臨むや勢に乗ずる暴虎馘河でなく、胸中必ず勝算があつて、而る後出陣した。即ち戦前に彼れの頭腦は豫め戦勝をあり／＼と豫見して、而る後戦つたから勝利は彼れに云はすれば既定の數であつたのである。

は努力の結晶が即ち英雄であつて那翁は之れに庶幾いと云ふことが出来ようか。彼れは微賤に生れた故に、よく社會の各層の事狀に通じ、人心を收攬するの術を心得て居た。彼れが帝王となつてから言ふた言葉に、「余の現在の境遇にあつては、あのフオーブール貧民窟にある貧民こそ余が唯一の朋友である」と

彼れは斯く賤民に接することを忘れなかつた。彼れは佛國の同胞を多く犠牲に供し國民の資財を糜したけれども、此の英雄を惡むことをしなかつた程人氣があつた。彼自ら云く、余に一人の情婦がある、それはフランスである。彼女は決して節操を破らぬ。

彼女は其血を其實を皆余に與へて惜まない、若し五十萬の生命を要すと云はゞ、彼女は直ちに、之れを余に與へるであらうと、彼れの自惚は斯くまでに至

つてゐる。若し彼れに王位に就くの野心が無かつたならば、彼れは永く仰がれたであらうに。あの、人の心も、己れの心も、

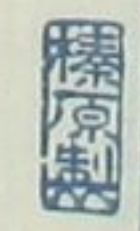
故山の冬

お高祖頭巾のその紫ふるさとや雪きしませて枯野なり尾花の銀の隠沼の行魚や棲風の陣芦越す風の夕沙や一つ狂へるビルの角切る寒月を浴裸木の碧空たの草寄りく木寄りく野襟巻に空ゆく風の

解剖する程の那翁も、成功に眩しては、遂に陥り易い陥穽に落ちた。噫!

〇二葉の句

あふさよ後を
こゝろあふさよはこゝろ
ハ田舎のさよハ 番兵
はと解すきんと少へ
れ
柘榴の皮に人肉の味が
あるとまゝ口癖を思
出し、氣をとどくろり
定まらぬハハハハハ



一得らる、西洋人の釣をぬちか、其竿ハ硬直の
り、[●]フック一七センチヤカ味がよく、魚が觸れまづブルク
の感にもよく、日本人かゝると、如くも無趣味が
あるが、西洋人七日本の釣竿を一たび使用して見
ると其の呼吸のよいこと、忘らんまゝの志きり
欲しからず、西洋人のいふ通り、價も高いのみ、日本
の洋人が来るまで、釣竿を買つて本まで土産
に持ちあふ、明治三十三年、巴里に萬國博覧會
のちうれ時、初代の竿忠とこの釣竿の名人が出
品したのが、好評を博した、其時の出資は十二本、
そのハ十五回、其一本、[●]フック一七センチヤカ味がよく、魚が觸れまづブルク
の感にもよく、日本人かゝると、如くも無趣味が
あるが、西洋人七日本の釣竿を一たび使用して見
ると其の呼吸のよいこと、忘らんまゝの志きり
欲しからず、西洋人のいふ通り、價も高いのみ、日本
の洋人が来るまで、釣竿を買つて本まで土産
に持ちあふ、明治三十三年、巴里に萬國博覧會
のちうれ時、初代の竿忠とこの釣竿の名人が出
品したのが、好評を博した、其時の出資は十二本、



こゝを穿へておろすといふ、實に金銀寶をもち、飾つ
てある、其の價は、[●]フック一七センチヤカ味がよく、魚が觸れまづブルク
の感にもよく、日本人かゝると、如くも無趣味が
あるが、西洋人七日本の釣竿を一たび使用して見
ると其の呼吸のよいこと、忘らんまゝの志きり
欲しからず、西洋人のいふ通り、價も高いのみ、日本
の洋人が来るまで、釣竿を買つて本まで土産
に持ちあふ、明治三十三年、巴里に萬國博覧會
のちうれ時、初代の竿忠とこの釣竿の名人が出
品したのが、好評を博した、其時の出資は十二本、
そのハ十五回、其一本、[●]フック一七センチヤカ味がよく、魚が觸れまづブルク
の感にもよく、日本人かゝると、如くも無趣味が
あるが、西洋人七日本の釣竿を一たび使用して見
ると其の呼吸のよいこと、忘らんまゝの志きり
欲しからず、西洋人のいふ通り、價も高いのみ、日本
の洋人が来るまで、釣竿を買つて本まで土産
に持ちあふ、明治三十三年、巴里に萬國博覧會
のちうれ時、初代の竿忠とこの釣竿の名人が出
品したのが、好評を博した、其時の出資は十二本、

いつとも見えぬうきまきむすの息天にひよよと
たたくあき

実かひきと福うつぶく人の身が重くさる福
のしあかつき

あけて遠く人を弱しと思ふうよふ勢あのかの
強さあき

近き長に無路をさくう釜の下廻りたやま
けあうたやま

よきしりまくは困つたお天氣を年前み
の人の世の中

一代の守本若たのぬか丸の人ともし飯と
けう



世の人の世を捨てし勸めりあとも捨ふ寺
の任職

上見んが及ぬことのもかりともま着んくも
か心

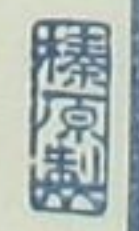
下見んが丸にまきりし者もうまじもえよ天の
あきと

川柳、俗名が呼んば業行いあくるうしとまが丸前
めんどうみえいねの権威かまのとおおうことだ

の衆人をか人をおかしがうんと、自か先の笑のう
ずるよかあまが却りともかおろし味を殺き真味

十ふ然れしと下手な奴う限つて人のおかしから
人先きにじん先が笑のうま。許し家め七狂をの

駆け出し木製のよひは然りかある。清後や海浜をさるる人
七不憚人の人におうゝものある。こととまふ前におもひ
いことをんから流すと隠す一語するが、そうするから
金と両方うい張とさうして其創りも真味を悪かろ
紅飛や伏句や川柳をいひも初句にさかしてはと
あつのがあつ。こんあひ金くの賛句いおかしきこと
新いらわと十七家のおかしきことを言ひ現いせんまは
よひの心備う十七家の(五)五字を無益とせらるる
ハ恩の骨頂い下におかしい話をさるる前と隠す
する初心の講演者とい一般である。
○その忘し難しとまふ人持だが老境に入ると此所
が一層切れる。毎方々からつらうの念れをさるる

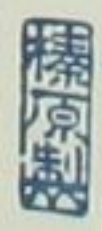


と来りる約りまふさうい自分七。○所仰かろ何か
あること、ゆゑ大切かつて是處まうせざるはなふ、まふ
まふか他不のよあつて味が(○)思ふも優んであつて
いふ、郷味とさふの感が或十パーセントか味をよ
くする。自分の郷國の物産を多く定めて生
活を愛する。此年七娘がゆも七折、山あ家からモ
ツペを貰つて来れのを自分の意をあるが、此以
雪が降つて二度の出ること七出まふの、清後の
某茶番を思ひ出し、祝歌くして送つて早速入り
定めたか、個飲うよか自分の歌をさるるよあ
ひ、いつかや清後の雪平のよあ某思ふうし、カン

ハハ新を油くると、多くは伊勢物である。
○便柄や不痢の因りや家庭の法は多く、下居新、筆下、
割りの剛のこと

湯山和名曰、若向外得一知一解、特为程道、且没交涉、
名運莫入、不谷運莫之、汚世心田、所以道不且
道。

吾子曰、人知莫莫其田、莫知莫其心
既北曰、人生何物、是未福、能公能者、莫能睡足
七きれいの養、一と行くや不佛、不親
其風馬の殿、すは枕もと、芭蕉



野雪深地花斬りかなる春
おろろくまむ帳面うつく御大友
思ふさま寝て者共はんせ物
吾子の梅は不痢する、飯寒うま、子親
危の宮見子や剛のむと七とり、子親
魂おろろの洗ふ物遠き、夜合冬、子親
湯の中むひう、此の玉は肩く、深き、川柳
さとのつて、ブケと放つ、此も佛さう
川柳の肩むすあしと叱らぬ
湯が放つ、此の玉はあごのちく、深き
馬の此のさか、は、御者く、一の谷
すれ、この隠す、は、控、あ、らん、の

龍宮が雷と思ひの懸の尻 川柳
 ちるんんん尻を這う金おあつたこ
 悉き茶いり茶に飲ぶよまがら産する尻
 るてく者りこそま
 ずかしえんかいかと思ひ武花やうんやまを
 分けしつる月こふあゆみ
 尻をうんとあだるるものと思ふらふブツ佛
 とりのあはれおとけろろけり仙履
 空の又空夢れ尻をみんやう
 いせりの尻蟻の行列吹きぬ
 惚れと尻を這つる花うひとりもの
 尻をいりん屋招から降りる宮大工

すかー尻の消えやすきこそ哀んらん、女いこや
 こをと思ひうこも

○北の尻のこせうけをト感ふことおあ市の都色に
 柱けり汽車のプラウトフスームのいどく本こくろつたこと
 がある、昔端着とい尾端にある二等車への住い直とあつた
 いぬ寝ぬすうかりしてあつた、尻を這ひ一端へ走り尻を
 するぬことおあ、時分のおあの坊主の惚合困る
 プラウトフスームの延長が即ち別車の延長を意味する
 る、三十年前には別車の教と比較してあつた、あつた
 信してあつた、あつた、道に車、教の教が増すと、こ
 すもあつた、あつた、二階のあつた、あつた、あつた、あつた
 あつた、あつた、汽車の延長、教のあつた、あつた、あつた

梁が盛んか、平しく延長するが、痛むの長きを長く
の、一寸お出するまでも、或の途程をゆくは、可なり、
歩行を愛する故に仕末に、この道は何とうか、おん
くまひのあつても、痛むを去くすること、が便利な法で
無い。

○二月廿日 急な解散後の衆議院法廷
及び寺のめ天幕の、恵め、これ今七、
投票された北河の投票場、急の、
け、所留の南正選、
七、道に自動車、と、
投票場



此に、候補もや、運動も、
ま、の、
者を、
一、と、
んり、
消去の、
め、
か、
野、
況、
静、
を、

前半の當り加減 一平
 思ひがけない驚奇を引あてる人、首の落ちた人形で、ケチる人



○昨廿百夜近 日開寫るん此法
 果を見んと民政の政変を歴
 し於木信哉ハ有選の不承
 せん社大黨かえんかの進出
 せし比三大都市で此選の
 候補が特に目立つる多数の票
 を得る南進し、國田と野村
 昭也を歴しをみるまれば何
 入政変ハ疑念も受けたらこの
 祝がある。
 かつこの選でハ開票が早
 こと選後通ハ結果の不承

政治新聞

を演んルよん此れをいふも選るも利しきを得ん。まゝに
 南西運動の進歩場を混泥せしめん。地盤もカバンし終り
 アテれらるん状態を早し取らば何カバンの作用が利か
 うら比の往來投票買収の勝利を得れよん。死んで危
 せんれ。而改選に此を懸て去るの進歩形勢の不振報
 と心つを例としんが、まゝか公選の選及を得るも弊害
 があることそのの免前終て去るが友に何移り、政府方
 有利の報生をし比ゆり、選挙陣つをえとまも干渉をす
 ることが経前より笑とまん比が、今次まを林と比か
 一勝選るの任果が豫想し難かつ比。

ても今の折全体にさうとまのが大体結果の政府有利があるか
 に見る、今次の選るの政友會の政府不信の在るに對し四民

の審判を仰ぐの如きあり、改定分は先づ員け此形勢が
あり。いつて政府と提携する黨派を、進退の妨げ有
利である、我邦の例である、實に其の如き
市大思想が手付つた、實意の隠れ干渉を、影
射者の後果を公平に、●●●といふ得る、然るに今も
政府側も此の隠れ干渉を、●●●と願ふ、●●●利を、
不利に託着する、●●●も偏頗する、●●●の行為を戒
飾し、●●●此の進退を、政府側が多数派である、●●●
は、●●●真の勝利と云ふことが出来、●●●即ち國民の
政府が改定分の抗争を、●●●政府支持の審判を
●●●其の如き、●●●と云ふと、●●●進出し、●●●の
分りの進退を、●●●社大黨が多く進出し、●●●の



案を得たの、●●●と云ふ、●●●の如き、●●●地盤とカバ
取り便く、●●●の進退を、●●●の下に在り、●●●が
有利である、●●●。何んとも、●●●の如き、●●●
と云ふ、●●●改定分は、●●●と云ふ、●●●、●●●
友と云ふ大改定分も、●●●と云ふ、●●●と云ふ、●●●
特色がある、●●●と云ふ、●●●と云ふ、●●●と云ふ、●●●
の、●●●の如き、●●●と云ふ、●●●と云ふ、●●●と云ふ、●●●
する、●●●と云ふ、●●●と云ふ、●●●と云ふ、●●●と云ふ、●●●
解する所がある、●●●と云ふ、●●●と云ふ、●●●と云ふ、●●●
大黨の主義信條の時勢は漸やくも切である、●●●と云ふ、●●●
其の志氣が、●●●と云ふ、●●●と云ふ、●●●と云ふ、●●●
此の進退を、●●●と云ふ、●●●と云ふ、●●●と云ふ、●●●

今度の選挙の試みは、試みれば官立の選挙
あるだけ興味がある。産商を産業とするは、官立
七止ちを得るの試みは、官立の試みは有り打の
契もある。是か着る方より現る。是の多く
選挙もあるが、下級官吏の非市職の試みは、
解り是の爲の選挙人を好む。長作せしむる
りべことか少くする。是の選挙人の試みは、
ことも是の試みは、下級官吏の試みは、
すの試みは、試みは、試みは、試みは、
投票の試みは、試みは、試みは、試みは、
り既に、試みは、試みは、試みは、試みは、
の試みは、試みは、試みは、試みは、

選挙

又市の試みは、試みは、試みは、試みは、
試みは、試みは、試みは、試みは、
り面側を、試みは、試みは、試みは、
又見し、試みは、試みは、試みは、
実験の試みは、試みは、試みは、
あり、試みは、試みは、試みは、
の試みは、試みは、試みは、試みは、
試みは、試みは、試みは、試みは、
有する、試みは、試みは、試みは、
所する、試みは、試みは、試みは、
か多く、試みは、試みは、試みは、

いんまおと擬せ奉回ぬとまのめつけぬも、既に四
氏に恒らるるの政令の此言ハ却つて黨派的苦肉の言とし
受取らん奉回一致と云ふる妨けるありて國民の反感を
受けることなき感か多のわきま、いんまおと政友の立場
の相違をせじ、民政の利を齎らししと判するも善し
なりしと云ふも、是れぬ批判とありしと判するも善し
今朝(十三日)朝日の評する所も、略々自分の思ふ所

東京新聞

總選舉の結果を顧みて 變轉常なき政友會

國民の指弾を買ふ 漁夫の利の民政黨

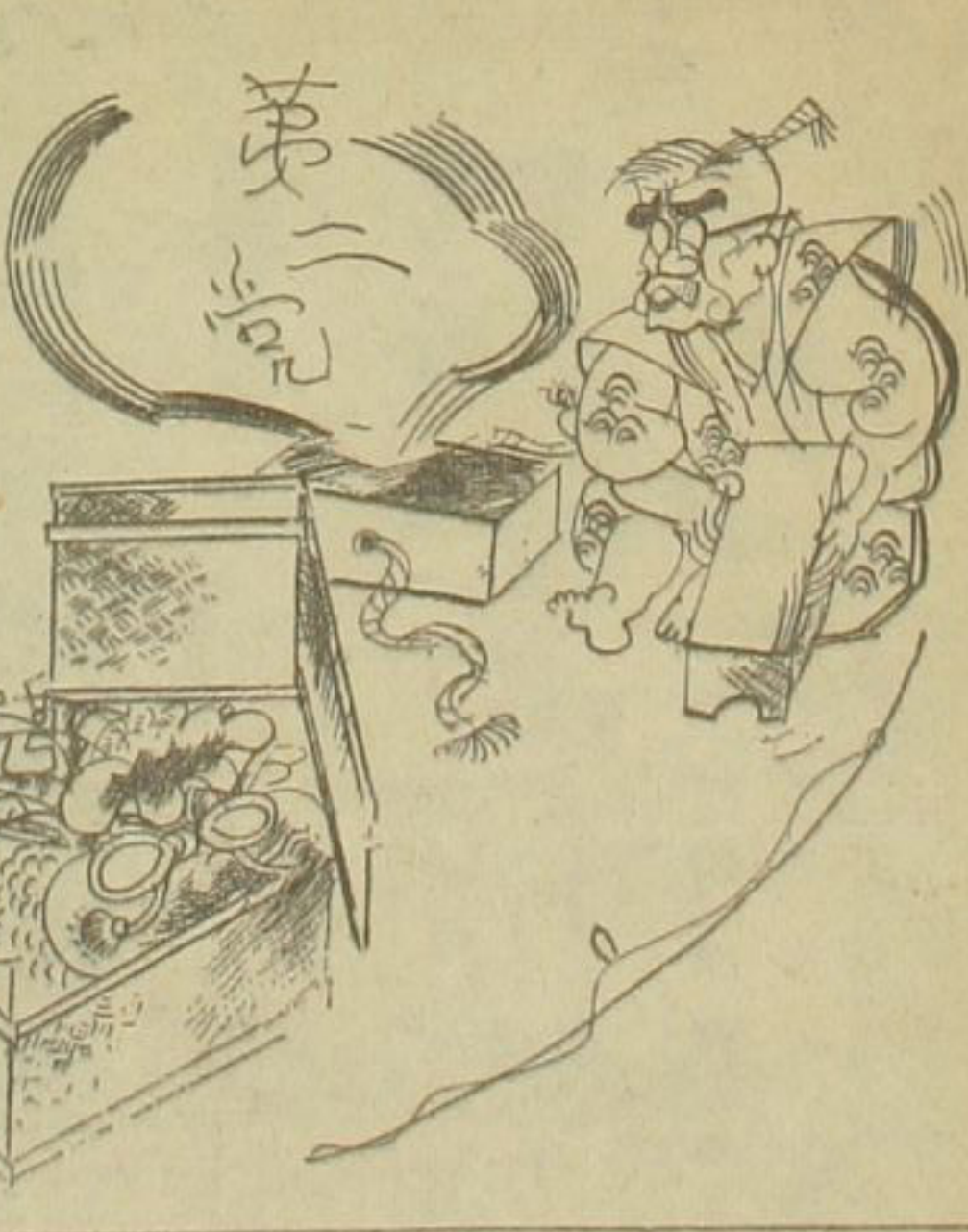
選挙第四回、應正の鳴り物入りも賑々しく幕を閉じた今回の總選挙——その棄権率の既述に到する比較からすれば國民が特にその總意を國政の上に反映させることに熱意があつたとは断定できなからうが、その最後の審判は選挙として既に決定、幾多の特異性を提示すると共に今後の政局は、愈々この政黨新分野を中心として岡田内閣の將來は勿論各般の政治動向を決定すべく政機動くの情勢を示して來てゐる、いま先づ總選挙の戦績を回顧し政局將來の展望に及ぼうといふのである。

鈴 木總裁を筆頭に將星
枕を並べて落選の悲
風吹きすさぶ政友會の自他共に意
外とする惨敗の原因は果して何で
あつたらう、先づ五・一五事件以來
フアツシヨの時流の大旋風裡に時
局を收拾すべく展開された學國一
致強固の齟齬、岡田内閣の成立
に對し政友會の態度が終始
首鼠兩端、或は援助するが如く或
は反撥打倒を叫び然も時に一節強
硬の時勢に阿付して國民の指弾を
買ふかと思へば政黨提携を策して
自由主義的飛躍を試み、動搖變轉
常なく確たる方針を欠いてゐたこ
とが國民に極端なる不満を與へ
た、この點民政黨と雖も同様であ
るが兎に角政友會は絶對多數を有

し第一黨を勝ち指導的地位にあつただけ民政の非はその儘に載はれて目立たなかつたと云へる。
更 に政、民兩黨の掲げ
る政策綱領に結構根
本的な差異が認められない今日、
政友會が選挙戦に當つて特に旗印
とした國體明確問題は國民の関心
をひかなかつたと共に所謂美濃部
問題以來政友會のつた國體明確
戰術はその動機に何等か不純なも
のを懸念せしめ反感をのみ排せし
てゐたことは所謂國體派前代議士

の多くが落選してゐる事實よりし
ても想像できよう。
更に現實選挙戦に臨んでは先に
選挙委員問題で内輪揉めを演じ
て以來總裁系、藤政友系、久原
系と鼎立し簡單運きた意志の疏
通を欠き内部的に統制がとれず
その不統一は戦線にも如實に現
はれると共に鈴木總裁の健康問
題は全国的に黨員の士氣を痛く
沮喪させた、これに昨秋府縣會
議員選挙における政友會の大勝
は心理的に幾多の油断を抱き實
際上の戦備また整はずは既述の
如き全般的な不人氣の中に行は
れたのであるから拙筆——吉戦
——敗戦の経過を辿つたこと當
然の結果と云はねばならぬ。

れに反し民政黨は異
黨として與黨必勝の
言はし通り榮々戦心を奮に勝つた
といふ他ないが自分ながら呆れる
程の勝利を見たのには天張り相當
の理由がある、今度の選挙は要す
るに學國一致の本意争ひだといは
れる通り政府先づ眞先にこれを唱
道すれば昭和、民政勿論これに唱
和し、政友會は懸案學國一致を排
棄して本家は己の軒のみを名乗り
出で無礙、右翼も異議ない態度を
見せた、従つて學國一致の必要と
いふ事實は國民の認識によく徹底



實のつららと玉手箱 一 平
中に新空氣を導入する意味で多少
の革新性を持つ無黨派を支持した
ことによる、但しこれは絶對一種
のモラル・サポートであつて無
黨各派ともに無黨派のみを支援
を過信して經濟問題を中心に所屬
階級闘争を今後發展せしめ得ると
考へるなら大きな過算を生じよう
開することが出来た。
要するに民政の大勝は民政特に
強かつたのではなく政友會外に
屬き過ぎたので民政は積極的
努力により攻勢を以て黨々の勝
利を博したのではなく民政傳統
の消極戦法を以て不作爲の中に
漁夫の利を獲たものであらう、
之に反し昭和會、國民同盟の不
振、脱落は大體想像通りを要す
るに兩派ともに特定人を中心と
する便宜的集團で中央政黨とし
ては存在の價値を疑はれること
が格別を感されたのである。
無 政黨の驚異的躍進
は數年來の極左陣營
の激進とともに無黨派なるものが
漸次民衆化し戰線的から實地的に
現實化し戦線も統一されて、い
は大地に足をつけて來たこと、
は大成政黨の無力無能に驚愕をつか
した國民がフアツシヨ的熱氣流の

れを要するに應正の
効果は買収を中心と
する多年の積弊を根絶したとは信
じられないが、豫期以上の威力を
發揮し從來唱へられた綱、看板、
地盤の選挙三パン説の如きは根柢
から覆へされた
即ち公費と選挙費用制限、買収
不能の事實は絶對に有利に化す
ると共に預説が唯一の有力な武器
となつたため偽りの看板は容易
に看破され既成地盤は新勢力
によつて地這りの崩壊を開始し
従つて従來重宝されてゐた地盤
獨立等々の所謂選挙技術は全然
無用の長物と化してしまつた
斯くして應正選挙は從來の選挙と
は根本的に異なる結果を招來した
多大の効果があつたが、これを主
催した官報方面に應正以外の他の
動機が潜在してはなかつたかは
今後の問題となるであらう

多数の支持を得るから各党のこの取り扱を扱め
おく

法選考の結果政府の利を得る政府の二つあるを得れば相
違ふが、此等の在りたる民選の大多数を得ればこと
か政府の今後は先を責めると確信せしめたるが、閣員
の数を比較的に増やしたる問題の如くであるが、保し民選
の多数をよめれば二つ三つの閣を席を並べ
ることの事案出来得べく思ふべき。政府は前を頼
りしとあれば民選の大多数を得ればことか政府
に取つて責任を負ふべきが、政府の後の病を
えんぬる。政府が国内の危険を感ずるに比
べ多数の支持を得るべきが、民選の二つ三つを

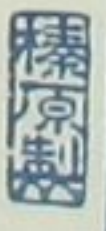


標榜して選考し、議院の比から、今更にこれを継ぎ
るに、行はざる。而るに、議院の非難を示すに、
せんが、いつ迄も、この、同日法裁は、選考後首相を
選考し、内閣を改選し、政府の責任を、真の責任
一段内閣を改選し、勅めれば、制を、動きの
ら、内閣の首相、出来の業、係し、現下、一政、
強よ、大、ガ、政府、今、一、政、口、を、標榜、
内閣、入、の、任、且、の、機、
んが、為、政、北、一、
大、定、一、
らん、と、
記、
行、

行動す

(二月廿四日)

魔の魔相を表現し、
 誘ひの窟窟と沈面、
 魄廻の悪鬼、
 因つて問名、
 手時少、
 房く口、
 又い、
 小佛法因縁、
 酒飲、
 あらゆる、
 ソの優、



ことごとく、
 酒飲、
 童子、
 最近、
 酒飲、
 傷、

▲酒頭童子と越後捕毛 私此の頃酒頭童子のことを少し調べてみますが藤澤衛彦氏の日本傳説研究によると童子は我が西蒲原郡砂小塚の産だが其母も亦常人ではなく實に禪太の密林の如き所謂越後々々毛のそ、鏡の所有者であつた、童子の偉大なる誕生はそれを強分けて世の中へ出て來るに七日七夜かゝつた相である、童子は幼時からなかくの不良兒だつたが、母が彼れを折檻するにはこの凄まじい捕毛で七卷半も捲き附けて締め上げては振り散らした、そこが後の巻町で、童子は一度大に苦しがつて内證で小刀を用意し一本一本切り放つた九十九本目に小刀が錆びて用ゐられなくなつた、そこ

が今日の赤縮村だと同書に記してあるが、此に又た文句の上からさうしても越后女以外に思はれないお竹さんのそれも佐渡まで届いて佐渡の金山を捲くこと矢張り七卷半と唄にうたふ、この七卷半といふことは依藤天に退治られた三上山の蜈蚣も同じく七卷半を捲いたと傳へられて居り執念の蛇の釣鐘を捲くのも殆ど七卷半が多い、下村代吉君の考證によると七卷半はハチ巻に半巻足らないといふ洒落でつまり完全でなく結局退治されるものゝ運命を發見せしむるもののだといふが、それは兎角前の二例もあり「越后々々毛のそ、鏡といふ

やうな言葉は笑ひ事なく越後人の人種學的解釋に多大の暗
 文を興へるものと思ふが、惜むらくは藤澤氏の記事の出處が
 明白でない。直接同氏に問ひ合せたら分るかも知れぬが、若
 し本誌讀者諸君の中に御承知の方があつたら報告して頂きた
 い。卷、赤縮の地名由來、果してそこらにこんな口碑でもあ
 るのだらうか(小林生)

吃比出生、七の七夜かいつれとある、そのものとは、
 有者むあつれとよみあが、此傳説の中心であるが、こゝか或る
 人種を自らのすまふもの人間々々と思ひゆるが、其の毛が
 赤、此赤又赤の心、赤赤の之れを切る又骨を折
 つれとよみのつ、さく飯後、傳説である、長髪女の婦人
 が山を七巻半捲いれとよみことと過にである、此のよみ
 長髪を人殺すもの何んと解くをあるか、未だ知らぬ
 が、其俗の一徴である、相違多い。亦此傳説の此を子



と砂子家の相違がある
 か、日方もある。酒日類書
 子の廿三年、母胎のめれと
 子のこと、此伝説である

を美醜とせり、地つて婦人に意いんれとて、且つ悪んた
 心、此の心とあるから、大江山に鬼とよみ、さうよみ、
 伝てゐるが、果しと何んの傳説、此をの揚ぐべきか、
 家つん判
 しく、伝説、此を、未だ、こゝ、ま、と、揚ぐ、せ、ね、

擁煙波蒼と偏踏し時新江中
ら若干と切り抜きまを厚好と
なさんと擬し此か思ふ所細く
又なせしもの道中に狼藉な
鶴助の念動き、左に此等を
ぬちと云ふ

昭和十二年二月五日

○三十年ばかり前の雑原中に高田早苗の村
惟男長の秋津林田雲梯が人お見え赤龍子を
訪ふに話をあつちする。高田ともある少へに話しか
人お家のあまのこを人を見るよめとある時一笑い
た。高田の法はよく

或は友を討つて死すべしと云ふも亦二入を重なるを以て
已むるに過ぎ得ぬ性も望むるも費しして
蕃城を去る事あり亦三月を去る人をも
七さすし悲しく暮らふと云ふ家を續てさる
人と、先づこの人の人を執りて其の性行を
評して其の歴を以て其を評するを指すか
まぬあるも、田村惟常のおるもつと云ふ
みつて又、後維のおるもつと云ふ、田村を評して
其の性を評するを以て其を評するを指すか
ぬの非死を新故するもつと云ふ、此の後の彼
と云ふも、但しこの維と云ふを以て、
創維

のむらさしは、後維と云ふも、
殺すもそのむらさしは、
みまつべきこと強くと物あり、
攻めを解散せんと、再是、
ん出ることを前にして、
の海の大体のむらさし、
容あり、判知し得ぬ、
人の運を判するも、是也

○日本衰弱のよそよそしい外人が驚かすものなり



日本は昔より富強なりけり。然るに近年は、
 諸し北から生い北の者あり。さきくじあるが、その一二
 を挙げし見ると、太平洋のジブラルターと云ふのを
 日本の天険、難攻不取を云ふの事あり。太平洋の不
 死鳥（ヒニックス）と云ふのも亦日本をさすの事ありて
 ヒニックスは火を焼けても立る年を経て更生する
 と云ふアウロロヤ、^つ北極の窟言から云ふのは、大空
 災後その大禍をメゲスマスに降興することと
 云ふものあり。こんな日本人を驚かすものなり。日本
 本を識りて言ふ事、毒刺ある貴蜂と云ふは、
 日本は長い間、蘭の中、睡臥を令つておる蜘蛛の如
 ころ、是か醒めて出て来ぬのを云ふと、蜘蛛の羽根

竹の悦めは畫竹、於て亦七難きを是く畫の
書に初めは四君子を習ひせるが畫是の畫例と云ふ
ありて、竹も四君子の一にあり、習ひ初めのよと
云つて、竹は、畫竹の、容易の、よと云ふ思
ひ、竹、を、支那の畫師の、人、の、雅、と、云
ふ、竹、畫、せん、日本、の、畫、竹、の、善、者、は、い、く、も、
善、く、竹、を、畫、を、善、く、い、ふ、竹、を、描、く、よ
う、の、禮、津、山、と、云、ふ、畫、竹、の、善、者、は、い、く、も、
竹、の、畫、の、意、匠、の、多、く、竹、を、描、く、竹、の、畫、の、
善、者、の、人、は、あり、僅、く、一、竹、畫、竹、を、畫、し、た、
か、ある、一、竿、の、疎、竹、の、七、ア、ト、人、を、云、ふ、竹、の、畫、



全く畫術の玉境を達してあるから、何と云ふ
て、竹の、竹、の、竹、の、竹、の、竹、の、竹、の、竹、の、
と、畫、術、の、玉、境、を、達、し、た、こ、と、は、畫、家、の、人、の、
七、だ、か、別、に、人、格、も、表、現、せ、ら、れ、て、あ、る、竹、の、
疎、竹、の、竹、の、竹、の、竹、の、竹、の、竹、の、竹、の、
畫、師、の、呼、ん、で、お、れ、軟、山、湯、か、り、サ、ス、竹、の、
竹、の、竹、の、竹、の、竹、の、竹、の、竹、の、竹、の、
見、て、者、い、は、れ、ら、れ、こ、こ、竹、の、畫、竹、の、
の、竹、も、及、面、の、竹、の、竹、の、竹、の、竹、の、竹、の、
く、竹、の、竹、の、竹、の、竹、の、竹、の、竹、の、竹、の、
竹、の、竹、の、竹、の、竹、の、竹、の、竹、の、竹、の、
竹、の、竹、の、竹、の、竹、の、竹、の、竹、の、竹、の、

實の其の人格の現れぬもの抹消すのらむいふか
ふかむか一燈葉一花一節も人の鑑賞を呼ぶもの其の
凡^端の言ふ可くもぬかあるかむかあるか此の由幽谷が
河の^中の^書の^意を^撰したのとも又か中^けの^源の^意を
値すも殊非かあつた、恐らく平山の著る言を味
け比ふも思ひんれば、自分もいふべき所の幅を創り
購ひぬぬと感ずるものか、いふか、いふか、いふか、
あるの、殊非後叙の^高の^意を^撰したは以^て時^には言を
の^と二^指と^思ふか、流るる此二人の言を、品位がある
この自分の看取ひもあるから、や、選擇もあつた
さて画井の^めの^感を^述ぶ^るも、^説き^難い、^自分^の外^の回
入^り外^を説^くに^は画^井、^眼に^たり^外人^の画^井



櫻 とうり前年(泰東)ひあると思ふか、
又大石正巳七十八歳が歿した、自分のも年時代も

馬備辰祐とて一時名聲を著したるも、後より其の
終末もいふもの、^自分^の人^を知^つた^ら、^後の^源の^意を
大田國統の^説を^撰した人とは、^後の^源の^意を^撰した人とは、
いふ南時^の説^を撰^{した}人の^記を^撰した、^後の^源の^意を^撰した、
と、^自分^の人^を知^つた^ら、^後の^源の^意を^撰した、
大田國統を^撰した、^自分^の人^を知^つた^ら、^後の^源の^意を^撰した、
、^未に^時、^大石^の意^を撰^{した}人^{から}、^後の^源の^意を^撰した、
市^の説^を撰^{した}人^{から}、^後の^源の^意を^撰した、
河^の説^を撰^{した}人^{から}、^後の^源の^意を^撰した、

此私大石と致る終焉に付、彼後の堂流の事柄も
清く、今ヨリ改進堂が甘才と号する時、大石
固執に足加する時、むいかに、と断つて互ひ酒
を飲んば、三日間、大石もぬらぬ、私の一言が
お念しむ、三日間、日解の間に、一書も大石固執を口
より、うらむ。夜分、後、焼持焼比と云ふて
焼たぐ、切つれ、他、の有る、過、おれ、自
分と、日解、自分、大石、持、勇、氣、持、び、
自由、空、連、と、可、成、一、緒、と、う、ん、や、う、と、策、
自由、空、折、角、の、定、人、と、私、に、就、
激、し、大、石、の、後、病、に、後、し、て、平、世、と、し、
石、も、ま、い、若、か、つ、れ、か、ら、、養、老、の、世、活、と、し、
や、う、と、思、

つて、序、を、ぬ、し、改、進、堂、の、事、柄、を、
又、肉、體、を、頼、ん、だ、り、し、
ある、間、に、或、る、娯、楽、の、間、に、
提、し、ある、一、笑、し、る、こ、と、も、
の、態、度、い、ど、か、大、き、い、
涙、の、熱、心、が、あ、つ、た、こ、
素、が、あ、つ、た、や、う、も、
七、年、前、早、稲、の、
七、月、十、三、日、記、

の衆議院議決の元は選挙の未了であるが府知事
員は選挙の目前に迫つてあるから選挙の未了は成案
に非ざるのである、主として政府の政令も和してあると
いふことは、然らぬが政府も本意を以てするものである、實に政
令が政令を握つた時代は、前記と異なり、アテを以てし
て、その政令は法律に準じて、然らぬと云ふべきである

社会の気運を以てして、此の時機に選挙の未了を行
ふのは、先づ、時機を得て居る現政府の政令に相違
ない政府に、いかに、支障を以て、政府の政令もあ
ら、公正を得るべきか、どうか疑問があるけれども、いづれ政府
を握つたものが、選挙の選挙に勝利を得るのが、或る
常例である、敢て干渉せざれば、政府の立つてある
選挙に勝利するから、恐らく公正に取解つて、民政
の上にも利あり、選挙の選挙に不利がある、民政の上にも
府の法に依つてある、選挙の選挙を見做して、あるが、
である。

自らの選挙の創始、政令の選挙の選挙の選挙の選挙
情と此の選挙の選挙の選挙の選挙の選挙の選挙の選挙

今日の選挙が腐敗の極まりに達したことを物言ひするに
及ぶことは暇を置かざるに思ふ。投票の受取を以て
一般に行われし今の年中として投票の受取に慣習とな
り。此の點を以て一概に選挙の弊を論ずるに及ぶべし。
又、選挙の受取の責任の所在。他人の責任に政府が
選挙の干渉と露骨にやつて、政府が不利な候補
を押し進めしめし地方官を使役ししめしとある。選挙
事務の神聖を言へば、選挙の事務は政府の専らに
を志ししめしめし、選挙の事務は選挙の事務に
巨大の運動費を支出するが、選挙の事務は選挙の事務
である。資本家が選挙の事務を資本家が選挙の事務を
て政権を握るべし。他の我儘が選挙の事務を打倒す

から巨大な出金を許さしめしめし。選挙が公候補
の金を許して、投票の事務を以て選挙の事務を
腐敗の極まりに達したことを言へば、選挙の事務は
自まつ。つぎ、選挙の金を以て選挙の事務を
勝者占めるの金と選挙の事務の金を以て選挙の事務
争ひある。選挙の事務は選挙の事務を以て選挙の事務
敗るるも無理に選挙の事務を以て選挙の事務を
して勝るか、選挙の事務の金を以て選挙の事務を
他の候補を以て選挙の事務を以て選挙の事務を
の回民が選挙の事務を以て選挙の事務を以て選挙の事務
けん、選挙の事務を以て選挙の事務を以て選挙の事務
と選挙の事務を以て選挙の事務を以て選挙の事務

るんか強て私の先輩が親族にあることを強て推
して私を抵抗せしめたのが、軍略の確たる優つたおれ
唯に私の側の強味は金湯家が後々後接したの
今更に傳へて、主の比五十九、
双舟家の前のは、其の金の後で、
かきこことか行つた、
金持の運動が、
角有力者も味方を持つて、
うん金をハラヤ時、
らうが、
突に初期より、
又上のべきもあつた、
こゝも、
自合の

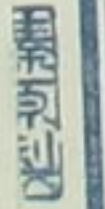
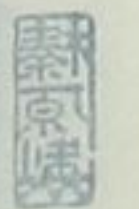
鎌倉

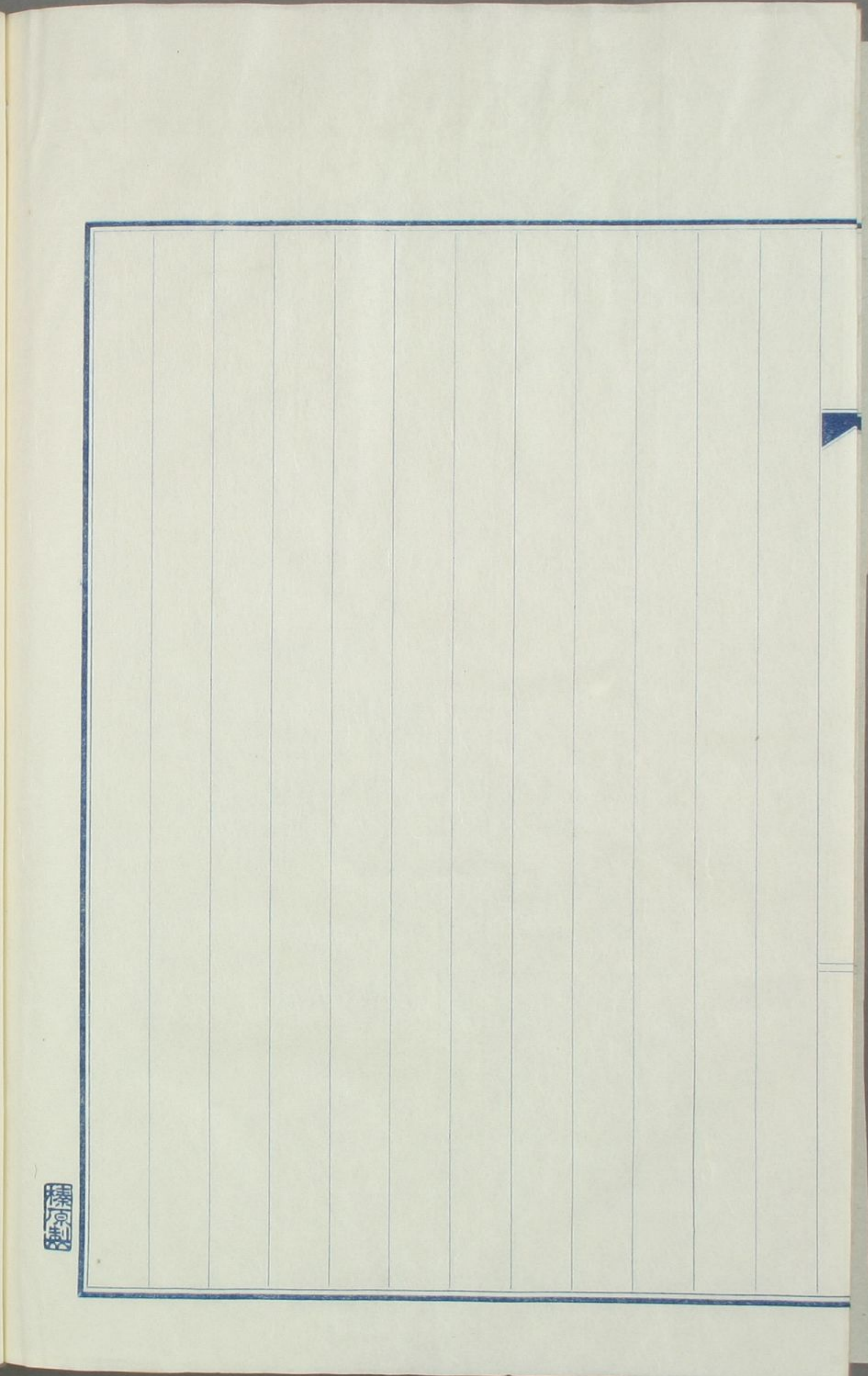
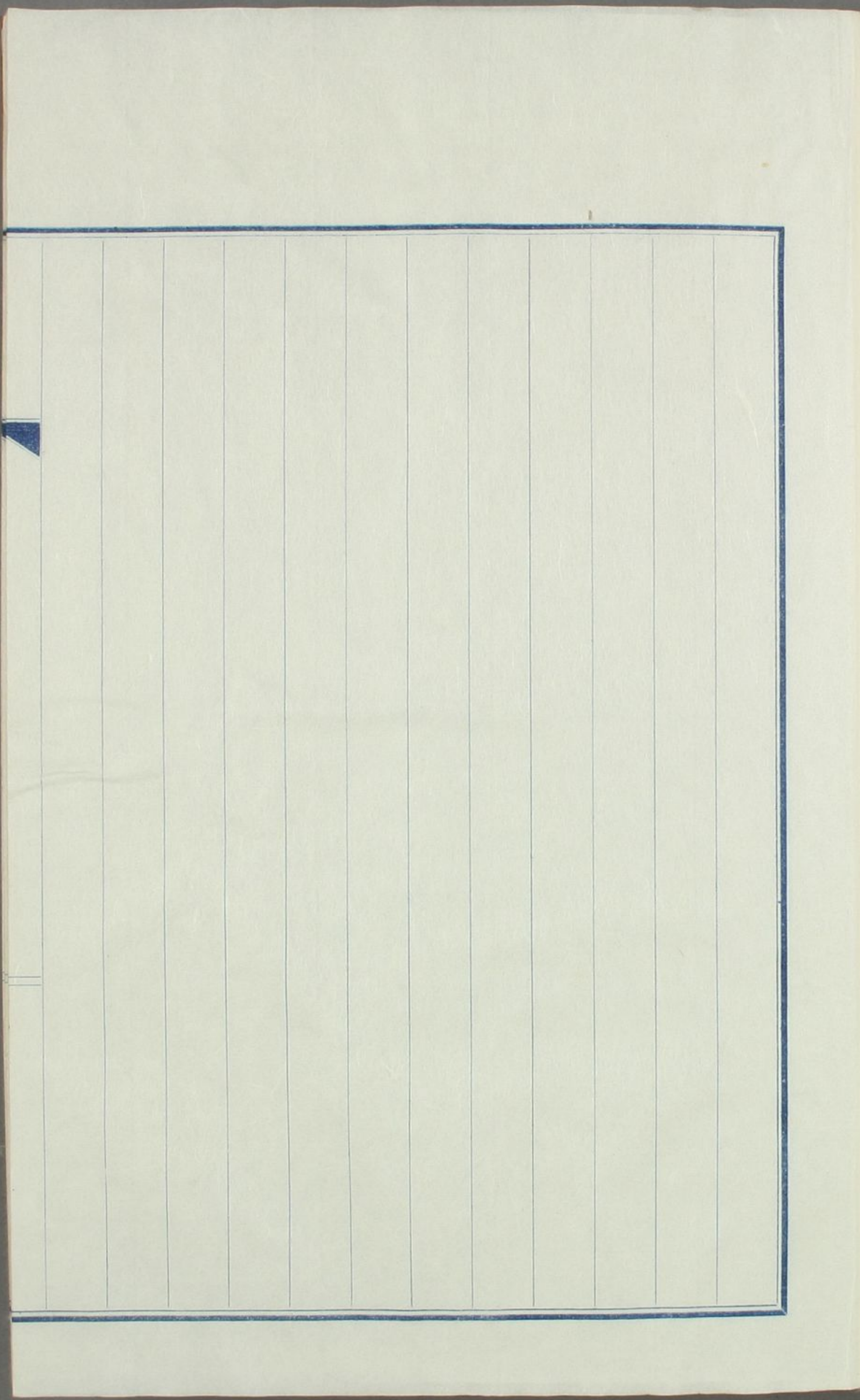
奉え先の準備、
ハ他、
ものれ、
併せ、
鬼舟、
窟、
の、
ハ、
人を、
ま、
か、
人を

楽大書

○自合の二十の節から出る。又、竹節を伴ふ。悠々
節、多少の風味を感じ、息もゆるい優を採つる
外國の節、を採ふことある。竹節、一、七、二、の

竹節の音、全紙や、削り、木の、柄
をハシタ杖を、全紙、押す、曲つた、一、柄、一、体の、自
然の、よ、分、進、れ、か、ま、古、い、さ、い、斑、の、あ、る、藤、の、把、手、が
曲つて、る、の、し、自然の、よ、分、の、筋、を、優、か、高、い、か、人、工
の、斑、を、心、り、た、よ、い、と、一、可、美、お、か、つ、う、ま、い、志、か、し、イ
ミ、テ、リ、シ、エ、ン、よ、い、な、る、好、ま、さ、い、か、よ、い、よ、い、の、減、多

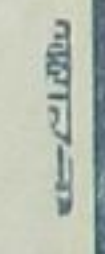




○都合の例へて東京の米は、文化の粹も其の純
燭目と奉る意は、飾りてあるが、一重の歌へて
こと美を産む埃の故を、或る神を、一と
都府の空を、一ヤマトの田中、ある埃の粒
の二倍と教ふる、この粒教を、握るると、其の重
量、一グラム位と、この割合が、東京の
埃と此割合が、約三千ト、即ち大東京
市民の頭上、と、埃は、大衆の頭の日方
夜、一と、



○西陣式、日本に於て、一等を、と、浴
室が附属して、西洋の片田舎の、よ、好む
都府、上流を、浴と、浴
浴の、一箇の、比え、と、思、は、滑、稽
を、浴、浴、浴、朝、ワ、浴、浴、
よ、向、浴、浴、浴、浴、浴、浴、
と、浴、浴、浴、浴、浴、浴、浴、
と、浴、浴、浴、浴、浴、浴、浴、
と、浴、浴、浴、浴、浴、浴、浴、



相馬秋風の逸事集の巻

☆葉言の奨推☆

退耕二十年その輝く業跡

高田早苗

友人相馬御風君は、早稻田大學文科の出したる、最も優秀な文學者の一人である事は、何人も異論が無からうと思ふ。惜哉（或意味で）君は一旦越後糸魚川なる郷里に引込んで以來、更らに東京の主を踏まず。尤も君のかゝれたものは著書や新聞雜誌で拜見するが、妙くとも世俗的意味からいつて、人間東京を舞臺にしない程働の上に損な事は無い。そこで私は相馬君に越後で御目にかゝる度毎に、出京を御勧めし、又親友市島春城氏と麗ば君の事を御噂をし、自分の説を主張した所が、春城氏は私の説に賛成しながら同時に、あれだけの人が越後に居てもらふ事も亦、極めて肝要だと常に附加へて居た。私はそれを聞いて、市嶋は不相更越後人だと思ひながら、更に考へると春城氏のいふ所は至極尤である。人物の中央集權、文豪文士が東京に計り集ることは、決して宣しい事では無い。殊に御風君の滿二十ヶ年に渉る糸魚川生活は、決して無益で無かつた。それは今度出版の六卷三千頁の隨筆全集によつて證據立てらるゝ。私は讀者諸君と共に、之を熟讀含味して、共に大に利し、大に益せん事を、切に期待して居るのである。

ける公領の消長

島

村

靖

佐渡は徳川時代を通じて幕府の公領、即ち所謂大領であつたことは今更ら言ふ迄もないが、越後に於ける公領は増減異動が非常に頻繁に行はれたので其變遷の跡を明らかにすることは殆んど不可能事に屬すると言つても差支あるまい。然し幕府は越後に於ける如何なる大名よりも廣大な領地を持つて居たことを考へる時、此問題の研究は必ずしも徒爾ではあるまいと考へたので、今日まで自分が些か取調べた概要を述べることにした。勿論誤謬脱漏の多かるべきは充分に豫期して居る。此點は豫め諒承を切願すると共に諸賢の叱正を冀望して止まぬ次第である。

越後に幕領が生じたのは元和二年からである。此年七月越後國守松平忠輝の改易に依り其舊領四十五萬石は一旦幕府の手に收められたのであるが、其年の内に、幕府は之れを酒井・牧野・堀・市橋・稻垣・其他の將士に分與し、只だ出雲崎附近六萬石の土地を幕領とし、出雲崎に代官陣屋を設け代官を任命して之れが支配に當らしめた。由來出雲崎は佐渡へ往來の要津であり、又漁港としても夙に繁榮して此地方の中心地であつたから、既に文明年中上杉氏は此處に陣屋を置き、堀氏も亦代官を派遣して最寄五萬三千石の地を支配せしめたのを始めとし、松平氏亦同様であつたのである。されば此地方の重要性を認めた幕府は松平忠輝の改易以來之れを直領としたのである。

出雲崎代官所は爾來或は其事務を長岡藩に、又は新發田藩に、或時は又高田藩に委託されたこともあり、又其管轄地域には頻繁な變動が行はれたが、大体に於て引續き明治維新まで存在してゐた。

越後に於ける公領發生の由來は先づ右の如くである。次いで天和元年六月、また高田城主松平光長改易の事があり頸城・刈羽・三島・古志・魚沼の諸郡に亘る其臺領二十六萬石は一旦幕府の手に收められたのであるが、貞享三年稻葉正通が頸城・刈羽・

元和二年

七月五日越後國主松平忠輝改易舊領一時幕領となる。此頃代官高田小次郎・井上新左衛門・水野齋宮等の名見ゆ。その内高田は出雲崎に在つて附近六萬石を支配せしものゝ如し。

三島諸郡の内十萬二千石を以つて高田城主となつたから、結局魚沼郡を始め諸郡に亘る約十六萬石の土地が公領となつた譯で、幕府は吉木村に代官所を置いた。これが、魚沼郡に於ける公領の起源で、之れは、やがて享保九年に會津藩に預地となり中頃直轄となり小千谷に代官所、鹽澤に出張陣屋が設けられたりしたが、寶曆十三年からは、再び會津藩の預地となり、又吉木村の代官所は幾變遷を経て川浦代官所となり共に明治維新に至つた。

貞享四年新發田藩の支藩である澤海藩主溝口政親亂心の爲め其所領一萬四千石は幕領となり、幕府は代官竹村惣左衛門を派して之を支配せしめた。併し澤海代官所は久しからずして元祿元年出雲崎代官所の出張所となり、更に寶永四年旗小濱氏の知行地となつた。

元祿十五年與板領主牧野武成は信州小諸へ所替となつた。其結果舊領三島・蒲原兩郡の内一萬石は幕領となつたので、幕府は之れを治める爲め、寶永三年代官所を西蒲原郡の石瀨に建て鈴木八右衛門を代官に任じた。石瀨代官所歴代の氏名は未だ明かにするを得ぬを遺憾とするが、元文五年には水野彦四郎、延享中には小野三太夫、寶曆年中には眞野惣十郎、文化二年には佐藤友五郎等の名が見え、又石瀨代官は一時或は水原代官所或は出雲崎代官所の支配地をも兼管したことが記録に見えてゐる然し文化十二年其支配地は與板藩主井伊氏の所領となり代官所も廢止せられた。

次に出來た大きな公領は蒲原郡の十萬石である。寶永六年九月村土城主十五萬石本多忠孝が卒し同族忠隆が繼いだ際、幕府は五萬石を忠隆に與へて十萬石を公領とし、館村と黒川に代官所を置き、正徳二年黒川を館村に合併した。

然るに享保六年に至り頸城地方の公領に於ける辭民が所謂實地騷動を起し勢猖獗で代官も手のつけやうがなく、騷擾は擴大するばかりなので幕府は其處置に苦しみ遂に享保九年閏四月五日、三日市・黒川各一萬石を柳澤保經・同里満兄弟に分與すると共に越後に於ける代官所を全廢し、公領は悉く附近の諸侯の領地とした。

松平越中守(高田藩)へ高十萬七千石(頸城郡の内)
牧野駿河守(長岡領)へ高六萬四千石(頸城・三島・刈羽・古志・魚沼・五郡の内)

溝口信濃守(新發田藩)へ高四萬三千石(蒲原郡の内)
松平肥後守(右松藩)へ高七萬五千石(魚沼郡の内)
松平右近將監(館林藩)へ高四萬七千石(蒲原郡の内)

右は頸城郡誌稿の記載する所で之に依れば享保九年閏四月に於いて幕府は越後に三十三萬石と云ふ廣大な領地を持つて居たのである、そして其中新發田藩の預所は享保十四年及び元文二年兩度の増領により八萬三千石となり、元文五年石瀨代官所が復活して水野彦四郎が代官に任ぜらるゝや其の管轄に移り、以つて延享三年六月に至つた。尤も其間一時長岡藩の領地となつたことはあるが、それは一小部分に過ぎなかつた。然るに延享三年幕府は北蒲原郡水原の舊城跡に代官所を建て附近六萬三千石の土地を支配させることにし代官内藤十右衛門は石瀨代官から其引渡しを受けた。此れが水原代官所の起源で、爾來水原代官所は其支配區域に増減變改があり、一時他の代官所の支配に屬したことはあるが、大体繼續して明治維新に至つた。

最初にも斷つて置いた通り越後に於ける公領の沿革は複雑を極め、到底僅少な紙面では其一斑すら述べることは出來ず、又精確なことは容易に知り得るものではない。然し極めて大ざつばな沿革は以上で稍々明らかになつたかと思ふ。それにしても本篇は中・下越に偏して上越に甚だ粗である。これは上越は殊に變遷が激しかったのと、史料が乏しいからで、此方面の研究の結果は、いづれ他日に於て讀者諸賢の叱正を仰ぐ機會があると思ふ。尙ほ次に公領沿革の略年表を掲げ本文理解の一助とした。但し之れとても取捨其宜しきを得ず、杜撰極まるものであることは慚愧の至りに堪えぬ。

越後公領略年表

元和二年 七月五日越後國主松平忠輝改易舊領一時幕領となる。
此頃代官高田小次郎・井上新左衛門・水野齋宮等の名見ゆ。その内高田は出雲崎に在つて附近六萬石を支配せしものゝ如し。

三月、三條城主市橋長勝(四萬千三百石)卒し藤井城主稻垣重種二萬三千石を以て之に代はる平地蒲原郡にて六十
 三ヶ村山東部にて十七ヶ村。殘餘は公領となりしものゝ如し。
 九月福島正則病死。舊領の内魚池郡の内一萬五千石は公領となる。
 三條城主稻垣重種大坂城番となり、舊領地は出雲崎代官之れを支配す。
 村上城主堀直定(十萬石)卒して嗣なく除封。正保元年に至る迄三年間公領となる。同年本多忠義村上城主となり
 十萬石を領す。

慶安二年 六月村上城主本多忠義(十萬石)奥州白川に轉じ松平直矩姫路より來り十五萬石を領す。此時出雲崎代官支配地中
 三條四萬石其領分となる。

元和元年 高田城主松平光長改易、頸城・刈羽・三島・古志・魚沼諸郡に亘る二十六萬石の封地公領となる。

貞享二年 十二月稻葉正通高田城主となり、頸城・刈羽・三島三郡内の公領十萬二千石を領す。

貞享四年 八月澤海藩主溝口政親所領一萬四千石收公。幕領となる。

元祿四年 十二月、有馬永風頸城郡系魚川に五萬石を給はる。按ずるに系魚川は元和元年以降公領たり。而して元祿八年五
 月には復た公領となる。

元祿十一年 三月澤海の公領中四ヶ村、出雲崎の公領中八ヶ村を堀直宥に給ふ。

元祿十二年 六月本多助芳頸城郡の公領中一萬石を給ひ系魚川に住む。

元祿十五年 六月美濃國岩村領主丹羽氏所領半減せられ、頸城郡の公領中一萬石を給はる。
 九月與板領主牧野康重小諸に移り舊一萬石は公領となる。
 十二月井伊直矩與板二萬石を領す。
 寶永二年 五月蒲原郡澤海の公領六千石小濱孫三郎行隆の知行地となる。
 寶永四年 九月村上城主本多忠孝の卒去により舊領十萬石公領となる。
 寶永六年 刈羽郡春日外十七ヶ村五千石安藤内藏之助の知行所となる。
 正徳元年 魚沼郡の公領中千谷川外十六ヶ村、刈羽郡荒濱村外十二ヶ村與板藩の領地となる。

寛永十年 魚沼郡に於ける十七ヶ村上知。
 享保九年 閏四月柳澤保經及び同里滿、三日市及び黒川に於て各一萬石を給ふ。
 寛保三年 四月魚沼郡に於ける公領中二十三ヶ村高二千八百石系魚川藩の領地となる。
 天明五年 舊高田藩主稻葉正誥遺領三島蒲原二郡の内二萬七千石公領となる。
 天明七年 十月田沼意明頸城郡の内にて上出外三十二ヶ村高二千九百餘石を領す。文政六年迄。
 寛政元年 十一月新發田蒲原郡の内九十二ヶ村二萬石上知。
 寛政四年 八月、椎谷藩蒲原・三島及び刈羽郡の内にて五千石上知。
 文政元年 七月刈羽・三島兩郡の内約一萬四千石の公領羽州上ノ上藩領となる。
 文政十二年 十二月新發田藩封替の爲め高一萬餘石の公領を給せらる。長岡藩領蒲原郡三湯新田の内高三千九百餘上知。
 天保十四年 長岡領新潟濱村高六百八石上知。澤海小濱長五郎朱地八ヶ村高二千石上知。
 弘化元年 十一月長岡領寄居白山外新田高三百三十石餘附寄島流作新田高八百八石餘上知。
 文久二年 十二月、長岡領蒲原郡の内坂井村外分郷共八ヶ村高三千石上知。代知刈羽郡の内七日町村外十八ヶ村三千三百石
 餘。
 慶應三年 十二月幕付新發田藩に對し沼垂町の上知を命ず、但し實施に至らずして維新となる。

村山、禰知、仁科、風間氏の研究 (上)

小 松 芳 春

緒 言

東頸城郡教育會に於ては去る大正十五年風間信濃守信昭入道妙賢が居城である安塚村直峰城頭に建碑をなし、信昭の功績を



圖覽

卷之二

